繋

Ｔｕ－Ｎａ－Ｇｕ

２０２５年　－第８号－

繋　第8号／目次

創作

二つの名前　飯田　労　4

花泥棒と蟇蛙（ひきがえる）　寺本親平　10

しがみつく（完全版）　内角秀人　48

六十代の川　藤野　繁　70

優しいだけ　池田　良治　78
アンドロイド　エリ　むらい　はくどう　86
断片
笑い　他　深井　了　38
合評会案内　37
あとがき　100

二つの名前

飯田 労

カット　飯田労

私は走った。夏休みは終ったとはいえ暑い日は続いていた。額と鼻の頭からは汗が吹き出し首筋を二筋三筋と流れた。追い掛けてくる男子生徒は何かはしゃぎ立てる声を上げながら、追いつくでもなく追い越すでもなく一定の距離を保っていた。だから余計うんざりする。いっそ私の方が走るのを止め三人に立ち向かおうか、とも思ったりもする。私が一体何をしたというのだ。

しかし私は彼等の気持ちが判らぬでもない。高校受験という苛立ちが単に私を追い掛けるという行動に駆り立てるのだろう。それとなぜ私がその標的にされなければならないか、という理由。私は時折右に折れ左に曲がる。その時ふと妙なオブジェ？　が目に入った。軒先の雨樋から下に落ちる一本が途中から折れ曲り、やがて太い竹を二つに割って中の節を取り払ったその先に古い木製の盥が置かれているのだ。

その横でおばさんが一人しゃがみこんで手を動かしていた。私は追われている事も忘れ立ち止まった。おばさんはきょとんとした表情を私に向けた。私は荒れた息を整えた。どうしたの？　とおばさんが問うた。私は思わず空になった盥を見詰めながら、喉が乾いちゃって、と正直な言葉を吐いた。おばさんは一瞬晴れ

上がった空を見上げ、ちょっと待っててね、と笑顔を見せながら家の中に入っていった。暫らくしてその手にはコップ一杯の水があった。さあ、これ飲んで。手渡せられたコップは冷たかった。私は一気に飲み干した。その様子を見ていたおばさんは、あれあれそんな飲み方をして、と言いながらコップを受け取ると、お代わりは？　と尋ね、私が頷くと納得したようにまた家の中に姿を消した。

二杯目を手渡された時、喉が渇いている時は一気に飲まないで一口ずつ噛みしめるようにして飲むのよ、と諭された。私は死んだ叔母様の事を一瞬思い出しながら云われたとおり一口含むと喉に流し込んだ。コップが空になった時確かに喉の渇きは無くなっていた。喉が乾いた時ゴクゴク飲むと腹が重くなるだけだよ、とおばさんは笑った。一息ついた私はおばさんに折れ曲った雨樋と竹の筒、そして盥のオブジェを指差した。おばさんは、雨水をただ流すのは勿体無いから少しでも利用しようと思ってね、と微笑み、お父さんに作ってもらったの、と答えた。水の流れ落ちる音って良い物よ、それに洗い物にも役立つし、と付け加えた。私は思わず、その竹筒の中に水車を置いたら峠の茶屋みたい、と言った。家族旅行の途中スケールは違うが岐阜の山道の小さな休憩場で見た水車を思い浮かべていた。そうだね、とおばさんは、じゃあお父さんが帰って来たら話してみますか、と改めて二つに割れた竹筒を見詰め、そうだ、ここを峠の茶屋と呼ぼうか、と笑い掛けてきた。私はウンウンと頷いた。それは幼い子供同士の秘密めいた約束事のように思われ、私の喉の癒しと共に心の癒しにもなった。次の日も又次の日も私は三人組に追われた。私はその都度峠の茶屋に逃げ込んだ。おばさんはいつも通りに冷たいコップの水を差し出してくれた。私は今はおばさんの言われた作法で一口ずつ噛みしめるように飲み、母には言えぬ些細な愚痴を聞いてもらった。

受験一辺倒の学校生活の味気なさ。いつも一人ぼっちの教室。本当はもっと重要な事はあったけど、それだけでも他人に言えるという事で私は満足だった。おばさんは、それは大変だね、でも頑張るんだよ、美里（みさと）ちゃんは芯の強い子だから大丈夫、と励ましてくれた。そう私の名は金光美里（かねみつみさと）。おばちゃんは美里ちゃんと呼んでくれた。そんな時間は追ってきた三人組にとっては姿を隠して待つ事に退屈を感じるのだろう、何時の間にか居なくなる。私は早歩きで失った時間を取り戻す。このところ晴天が続いた為か盥に水が溜まる事は

なかった。

その日は突然の大雨だった。翌日行ってみると盥には満々の水が溜まっていた。ふと隅を見るとそこに小さく細長い竹片や小板がぞんざいに捨ててあった。おばさんあれは？　と尋ねると、おばさんは笑いを堪え、水車の残骸、と答えた。昨日の大雨の日いくつも試作した水車を設置したそうだ。その総てが無残な結果に終わった。竹筒を流れる水が少ないと役には立たず、水量が溢れる程に多いと簡単に壊れてしまった。丸められ捨てられた残骸は見事に打ち砕かれた叔父さんのプライドの痕なのだ。私とおばさんは二人して高々と笑った。

そう言えばこんな事もあった。突然に私の顔を覗き込むと、美里ちゃんのところって漬物食べる？　と聞いてきた。漬物？　日本の漬物？　おばちゃんは私の返事も待たず、今年はもうシーズンも過ぎたのにまだキュウリが豊作でね、やっぱり異常気象かね、と言いながら家の中に入っていった。暫くして大きく膨らんだビニール袋を持ってきた。これキュウリの浅漬と糠漬、近所にもお裾分けしてるんだけど、と言って私に手渡した。思ったよりも重量感があった。家に持って帰って母に手渡した。でも一度もテーブルに載った記憶はない。あの大量の漬物を母はどうしたのだろう。

秋も深まった頃だった。ママはいつになく多めの白菜を買いこんできた。唐唐辛子各種ニンニク生姜魚介など、キムチ作りは我が家の季節行事だ。無論私も手伝う。ママが母親から、その母親がその又母親から。代々伝わる秘伝の調合。二週間程経ってちょうど食べ頃になった日、母は峠の茶屋に一緒に出掛け、先だっての漬物のお礼だとおばちゃんに手渡していた。母にしては珍しい事だった。

やがて三人組が私を追う事はなくなった。それと同じくして峠の茶屋に向く私の足も次第に遠のいていった。やがて暮れも正月もない受験戦争はそんな事さえ忘れ去った。無事に希望の高校に入学する事が出来た。しかし喜びも一瞬のうちですぐに大学への受験準備が始まった。高校は峠の茶屋とは反対方向にあり、私はおばちゃんの事もあの一杯の冷たいコップの水の事も思い出す事はなかった。

高校卒業の日、私は民族の誇りと自身の自覚をもって民族衣装であるチマチョゴリで出席した。オモニが

若い頃の物だった。卒業式も終わり記念撮影も終わり、私達は帰路についた。家に近付いた時私はふいに峠の茶屋のおばちゃんの事を思い出した。ぜひこの姿をおばちゃんに見てもらいたい。私は、アポジお願いがあるんだけど、とパパに言った。アポジは機嫌よく頷いた。私は峠の茶屋のおばちゃんにこの姿を見せたいの、と答えた。峠の茶屋？　なんだいそれは。オモニが微笑みながら手短に説明した。アポジは、少しだけだよ、と困ったような顔付で頷いた。私は後部座席から身を乗り出すようにして右だ左だと指差した。

運良く峠の茶屋の前におばちゃんがいた。私は卒業証書を片手に飛び出した。びっくりしたようなおばちゃんの顔。私は思わず抱きついた。おばちゃん、元気だった？　私今日卒業式だったの。三年間のブランクをなじるでもない普段通りのおばちやんの笑顔。そして私の姿をマジマジと見詰め、美里ちゃん可愛いいね、と物珍しそうに腰の辺りの生地を触った。オモニが、あの時は大変お世話になりました、と誰にともなく頭を下げた。四月からはアポジの仕事の関係で家族全員京都に移る。もう会えないかも知れない。私は手近にその事を伝え、あらためておばちゃんの顔を見詰め言った。そして・・・意を決し

「おばちゃん、実は私にはもう一つの名前があるの」

おばちゃんは怪訝そうに私を見詰めた。

「金美里（キムミリ）」

私は力強く言った。

一瞬キョトンとした表情を見せた。おばちゃんには判ってもらえないかな？　とその瞬間おばちゃんは大きく頷くと私の両手を握りしめ、しっかりと見据えると

「美里（みさと）ちゃんも美里（ミリ）ちゃんも、二人とも頑張るのよ」

思った以上に力強い力だった。

その時車のクラクションが小さく鳴った。もうアポジったら。私とオモニは別れを惜しむように今一度頭を下げると車に乗った。時間に追われるように車は後部座席の窓を開ける余裕も与えず走り出した。振り返るとおばちゃんが手を振っている。車はすぐに角を曲り、その姿は見えなくなった。

おばちゃんの笑顔と峠の茶屋、そして一杯のコップの水の冷たさを思い出した。喉から胸へ冷たい広がりを感じ私は深々と座席に身を沈めた。

完

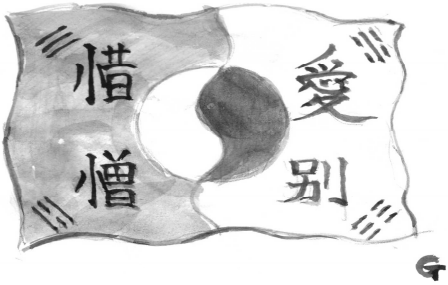
あとがき

昨年の九月中頃から体調の不良を感じ、検査の結果飯田労には似つかわしくない「白血病」という病名で即入院となった。抗癌剤の副作用の辛さはかねてから聞いてはいたがまさか自分が体験しようとは夢にも思わなかった。

毎日微熱が続き全身重いだるさに食欲はまったくなく（院内食を見ただけで吐き気がして食べられなかった）輸血と栄養剤の点滴に頼る毎日だった。ベットから降りる事もできず体重は激減し奥羽地方の即身仏のごとくになった。頭は元々禿げていたから脱毛という事はなかったが、その替わり頭の先から足の先まで一皮剝けた。昔は「一皮剝けた良い男」という言葉があったが一向そんな気配もなかった。

ようやく微熱は失せてきたが体力の衰えは甚だしく一人で歩くのも困難を極めた。そんな中ふと小説が書けそうな気がした。最初は数行ですぐ疲れがでた。血液量も極端に減っていたからだろう。それでも行数は増えていった。ある日書きながらふと、もう少し長生きしたいな、と思った。（それまで自分の死ぬ時期など考えもしなかった）

内容はともかくどうにか一編の作品を仕上げる事が出来た。（なぜこの作品を選んだのか？　それは私にも判らない）ただあの状況の中で書けたという事は励みにもなった。これからも書き続けたい。それが駄作であろうと凡作であろうと。



カット　後藤必

花泥棒と蟇蛙（ひきがえる）

寺本親平

カット　後藤必

「あっ、ぶつかるっ、お父さん！」

そう叫んだ妻の声が聴こえたとたん、ぐわっしゃーんという凄まじい音が響きわたり、車がひっくり返るのがわかったが、何がどうなったのか、訳が分からなかった。

兎に角、こちらの軽四に、何か大きな車が横手からぶち当たってきたのは確かなようだった。どっかーんではなく、ぐっしゃーんという潰れるような大音響の、身体中へ染みこんでいくのが、慣れ親しんだ空間から別の次元へ運ばれていく感じがした。気がつくと、フロントガラスに頭を突っこんだらしく、ガラスの破片らしきものが頭部一面に突きささり、ざくざく音を発（た）てているのだった。（最近の車のフロントガラスはガラスの破片が散らばったりせず、蜘蛛の巣状にひび割れるようになっている筈なのに……先祖帰りをしたのか）と可笑しな訝りかたをしている。

その間に、前頭部が横に切れて血が流れだし、顔面から胸元へ滴りおちていのるが分かった。たいして痛みは感じなかったが、どうやら右の耳からも血が溢れだしているようだった。車の外から慌てふためいて、「おとうさん、大丈夫？」と上擦った妻の声がした。こちらは右の肩が何かに挟まり、左の下肢もぬけない。

息苦しい体勢ではあるが、「死ぬほどの怪我ではないな」と見定めている。

「あんたはどうや。大丈夫か！」と妻を気遣い、口中に這入ってくる血とともに大声を放った後、「相手の方はどうや」と云って、血をがぶりと呑みこむと、甘みを感じた。

眼前を黄色い銀杏の葉っぱが乱れとび、黄一色の景の奥から、「ぺたぺたぺたぺた」と、何かが跳びはねている跫音のようなものがさかんに聞こえてくる。確かめようと目を見開きむりやり顎をあげてみれば、なんと何百羽ともしれぬ小型の白ウサギたちが群れをなし、橋のほうへ向かって、ぴょんぴょん、ぴょんぴょんと撥ねながら移動していくではないか。（それらは穴うさぎという種類の、日本海側の島々や対岸の韓国から台湾辺りまでに棲息する、地面に穴を穿って生きている小型の兎だと、テレビで紹介されていたのを観た覚えがあった）

雪崩れのように転がりおちていくウサギの群れが消えてしまった後には、何だか黒っぽい塊が点々と残っていた。

大きな音を聞きつけて集まってきた人たちが、運転手をひっぱりだそうとしているが、みな年寄りらしくどうにもならず、「救急車がもうすんに来るさけ、少しの辛抱やで」と声をかけてくれる。

そのうちサイレンをならした救急車が到着し、隊員たちがこちらの首がフロントガラスから突きだしているのを呆気にとられた感じで眺めながらも、首周りのガラスをとり除いてから、こちらの腰から背中へ平たいボードのようなものを差しこむと、いとも簡単に運転手をひきずり出していた。

手際よく右の耳朶と頭の疵を消毒して布をぐるぐる巻きにし、身体のあちこちをさわりつつ、「骨の折れとるとこはないみたいやわ。けんど、酷いガラス頭やわ」と笑いをかみ殺しながら話しているふうだ。

禿げた頭にガラスの五分刈りの白髪が生えたというのか、割れた破片が脳天のあちこちへくい込んでいるらしい。救急隊員を不謹慎呼ばわりはできまい。

ストレッチャーに移動させられ、忽ち救急車の主人公になった。

一緒に乗りこんだ妻に手をさすられ、「すぐ病院へ連れてってもらえるさかい、頑張ってね。しっかりね」と声をかけつづけられ、隊員の方が、「いま、点滴をしますからね。頭は痛みますか」とライトで目を照らしているのだった。

「いいえ、大したこと、ないです」と応える。
「そうですか、病院まで二十分ぐらいかかります。少し揺れますが、辛抱してくださいね」と救急隊員が耳元で大きな声をあげる。
　そうこうしながら走りだした救急車のがたつき具合は酷かった。前回転んで頭から血をたらふく流した時にのった救急車が、タクシー並みに乗り心地がよかったのに比べると格段の違いだった。それになかなか着かない。やっと辿りついた時には、歪んだ夕日の影がビルの壁面を舐めていた。
　待機していた看護師などが持ってきたストレッチャーへ怪我人を移しかえた。廊下を走る音が心地よくひびく。
　手術室へ入ったのがわかる。医師の声が天井からやってくる。
「あなたのお名前は」
「手良元邦一（てらもとほういち）です」
「生年月日は」
「昭和十八年四月四日です」
「車のナンバーは」
「金沢・５４６９です」
「ほう、厄介な数字ばかりですな。ではこれからガラスの破片を取りのぞいて、開いた疵を縫いますからね。少し痛いですが我慢してくださいね」
　５４６９の何たるかを知っているらしい。　我が地域ではこの数字がならべば、【ごしむく】と読む。それは死んでしまうという意味の方言である。
「麻酔の注射なんかしなくてもいいですよ」
「そうはいかんでしょう」
「中耳炎や帯状疱疹の痛みにくらべたら、なんでもないですよ」と余計なことを口走る。
「ところで、貴男の守護神はどなたでしょうかね」と思いがけない質問が降ってきた。
「守り本尊のことでしょうか」と問いかえせば、「そうです」と耳元へ口を持ってくる。
「大日如来ですが……」と返すと、「やはりそうでしたか」と肯き、返す言葉で看護師に、「０・５の糸にしようかね」と云っている。「そうですね、それくらい細いほうで良いと思います」と同意している。
　医師は、「貴男のご意志には添えませんが、まず麻酔の注射をしますよ。効いてくるまでしばらくお待ちください。それから右の耳朶が千切れて、行方不明になってまして、こっちのほうは諦めてくださいね」と顔が動いて、天井からの照明が炙りだしにかかった。

「眩しいでしょう」と看護師が掌を目蓋に載せてくる。暖かい掌だ。嬉しくなる。
「すぐ布で被いますからね」と云うので、「否、このほうが良いです」とせがんだ。「貴男、わたしが若い女だと勘違いしてません？」と云うので、「若くなくても良いです」と返せば、「先生が貴男の目蓋を縫うわけではないんですよ！」と答えにならぬ声を荒げて掌をどけた。一遍に目が冷えた。
それからは手順どおりなのだろう、消毒をしてからおもむろに、極細の糸で丁寧に八箇所ほど縫合していくのを天井のほうから見ている。痛くも痒くもないので、麻酔の注射無しではどの程度の痛みなのだろうかと想像している。医師は一針一針縫った後、指の腹で軽く押さえては処置を進める。
縫いおわって、「さぁ今度は、ざくざくと噛みついているガラス片をやっつけますよ」と指先で当たりながらぬき始める。
やはりガラス片が動くとひびく。脳天の皮がひきつり、ガラスがいやいやと駄々を捏ねる。結構手間どっている様子だ。
その間に、半分になっている耳朶を縫い合わせる為に打った麻酔が切れて、痛みがずんずん増してきていたが、血は止まっていた。
「だいたい見た目では取れたようですが、ＣＴで確かめますね。しかしこの頃の蜘蛛の巣状にひび割れるフロントガラスを突きやぶるとは、貴男のデコベは相当な強者ですな」と感心している。
画像が届くまでしばらく待ちぼうけである。その間、また看護師が掌を載せてくれた。先の掌とは感触が違い、柔らかくしなやかなのがわかる。
掌が離れ、医師が指先で画像とガラス片の残っている箇所を確認している。
「まだ、少し喰いさがっているのがありますね。指の先は、『もう判りません』と云っているのですが……」と首を傾げているふうである。
「いやぁ、申し訳ありませんでしたね。なにせ、『出るのが否だ』と逃げるわ、隠れるわで、おおいに手こずらせましたので」と詫びをいれ、「二十箇ばかり取れましたが、ご覧になりますか」と宣う。トレーのなかで悔しがり、互いをこすり合わせのたうっている大小のガラスたちを見てみたい気もしたが、耳朶がどっくんどっくんと悲鳴を挙げてきているので、「いえ、結構です」と断る。
「そうですか。それではこれで治療を終えますが、麻

ノ川病院の先生宛に、こちらの処置書とＣＴの写真を用意しますので、お持ちになってください」と云うなり、さっさと手術室を出ていった。礼を述べる暇もない。

妻がカーテンのすぐ横のベットにいるのがわかった。顔を合わせると、妙な顔つきになって、くすりと笑う。「どうや」と訊けば、「うん、ちょっこり首が曲がりにくいわ。軽いむち打ちかも知れんけど……」と云っている。

ベットから下ろされて、妻の顔を見たら、右目の周りが少々青黒くなっている。

看護師が、「大きな事故にしては、お二人ともこんな程度で済んで本当によかったですね」と云ってくれ、言外に、「どちらかが命を落としていたかもしれないのに」という言葉を含ませているのがわかった。

相手の車が当たってきたのは、妻が座っていた助手席の後ろのドアで、妻は逆さまになった姿勢のまま割れた窓から這いでたようだった。このまま家へ帰って良いと許可が出ていたので、二人でゆっくり歩いて待合室のほうへ行くと、長男と妻の弟が待っていた。

「邦一さん、まち子、軽くていかったのぉ」と、妻の弟のほうがまず声をかけてくれた。

その後、「あんた、何やっとんや！」と長男が怒鳴ってきた。それでもこちらの姿を見るなり、妙な苦笑いをした。なんだかわからないが、「堪忍な」と頭を垂れるだけだった。

後で廊下の角にある鏡を見て、納得したことだった。疵口にうず高く積みあげれているガーゼが、老人の丁髷（ちょんまげ）に見えるようになっているのだった。

改めて、「あんた、おかぁさんを死なすとこやったんやぞ！」という長男の声が何度も響きわたり、耳の激痛と重なって頭ががんがんし、平謝りにあやまるだけだった。

「ご免、ごめん」と頭を抱えながら長椅子にうずくまると、妻が、「いっちゃん、もう良いから」と長男を制した。

その時、待合室へ母親らしい若い女の人と男の子が入ってきた。男の子は四、五歳と思えた。黙って俯いているが、両脚は落ちつきなくバタバタしている。

母子の後から、件の医師がやってきた。

「ＣＴの結果は異常なしでしたから、まずは心配ないでしょう。この後まだ痛みが続くようでしたら、再診しましょう」と優しい声で母親を宥める。

「そうですか、またお手数をおかけするかもしれませ

んが、どうか宜しくお願いします」と深々と頭を垂れる母親を、男の子がちらりと横目で睨んでいるのが見えた。横から見ても、その子の瞳が前後左右、上下へとぐるぐる廻って、視線が定まらないのがわかる。

「先生があゝおっしゃっておられるので、大丈夫だからね」という母親の声掛けに、黙して答えずである。

およそ七百年前に生きた、中国の、「姿色人に絶」した類稀な美人だったという慧春尼を想わせるような、着物姿の母親のぬいた襟から肩にかけて細かい青痣が見えた。

「タクシーを呼んでくるから、ここで待ってるのよ」と、母親が強く念を押して出ていった。男の子は足の五指と踝を交互に上下させている。何故か昔のこちらの次男を想いださせるのだった。

母親に促されても動こうとしなかった男の子が、歩きだしたこちらの左手の親指をいきなり握ってきた。ちっちゃな五指がぎゅっと絡んで、幼い熱い血が雪崩れこむ。

胸の昂まりがおさまり、指と指の間にほどよい隙間をつくってから、そっと握りかえしてやる。手汗が薄い血の膜のようだ。

「おかぁさんが戻ってくるまで、この子をみとるさけ、先に車へ行っててくれんか」と頼んだので、長男が、「何を言うとるんじゃ」という顔つきになったのを見て、妻が、「それじゃ、先に行っとるね」と場を繕ってくれた。男の子と手をつないで、病院の廊下の横板を押しひらくと、その板がそのまま庭を眺めるための腰掛けになっている。二人してそこへ腰を下ろした。

庭にはさほど大きくはない池があり、正面の築山にある、丸い天蓋のように枝葉を拡げた椎の大樹から、ぬっと顔を出した感じのお月さんが目に飛びこんできた。当然のことに、池面にはその望月が映っている。

五階建ての病棟の上のほうから、入院患者の誰かが般若心経を濁声で月に向かって唱えているようだった。

自然にこちらもその声に唱和していた。

男の子はいつの間にか、こちらの開いた股の間に尻を落として仰向いている。

「坊の名は何と云うのかな」と問えば、「名など無い」と言う。

「それでは、家はどこかな」と問えば、「知らん」と言う。

「ならば、歳は幾つかな」と問えば、そんなものも知らん」と言う。

「そうか、何も知らんのだな」と云えば、「何も知らん

のが一番や」と応える。
「お月さんが哀しそうやな」と云うと、「ほうやな、泣いとられるみたいやな」と応える。
「あれはなあ、泣いとられるというよりか、大きく息をしとられるんじゃ」と云うと、「息を吸うたり、吐いたりしとられるんかぁ、ほうか、ほんで、お池のお月さんも波がたっとるんやな」と言う。
「難しい言葉で云うと、瞬間移動と云うんじゃ。じゃがなぁ。お空のお月さんとお池に写っとるお月さんには随分と時間差があるんじゃよ」と云ってやる。
「へぇ、ほんなら、お月さんが池に映っとるんやのうて、池まであっという間に何遍でもお出でとるいうわけか」と言う。
「まぁ、そんなとこかなぁ」と返事をすれば、「ほんなら、宇宙飛行士がお月さんに行って戻ったら、なんぼか、年寄りになっとるいうことかいな」と怪訝そうにこちらを見あげる。
「身体のほうはなあ。お月さんの実態、つまり物自体に触れてきたということだけは確かやろなぁ」と受ける。
「ほんなら、僕ら二人が観ているお月さんと飛行士が触れてきたお月さんとどっちが本物なんやろか」と言う。
「良い質問じゃな。物そのものを本物とすれば、本当のことがわかったということになるんじゃが、本当のことがわかっても、良いことにつながるという保証はないのじゃよ」と応えてやる。何れにしても、人類が宇宙へ向かって進出するのは決まりきった事なのであるが、そのことに関しては云わなかった。
「ふぅーん、僕はこうして観ているお月さんのほうが一番やおもうわ」と笑顔で言う。
後ろに人の気配を感じてふり向けば、母親が膝を抱えた姿勢でしゃがんでいた。
「おかぁさん、このお子さんは神童ですな」と云うと、「いいえ、病気という訳ではないらしいのですが、多動性障害という特殊な脳の働きがあります」と応える。
そうか、多動性障害というにしては、温和しくこちらと一体化して、話を聞きわけているではないか。
母親が、「さぁ、タクシーが待っとるさけ、もう行くよ」と子供の手をとり、こちらに同化していた神童をひき剥がした。
男の子はふり返りふりかえりして、廊下の角を曲がって見えなくなるまで、身体全体で小躍りし、両手を振りつづけていた。

間を於いて、玄関先へ出ると、また救急車がやって来ていた。コロナ禍で一息衝いた日曜日は救急車が大忙しだ。

「早う、乗ってや。車のなかの物を警察署で預かっとるいう話やさけ、貰いに行くぞ」と長男が苛ただしげに急かす。

長男の幾らか荒い運転になっている車に乗りこみ目を瞑る。

福光警察署へ行く前に、長男が、「事故現場へ寄っていきたい」云った。その場へ誘導しながら、「あっ、行きすぎた。バックして」と云うと、車がそのままバックし始める。

「ああ、そうやないて、Uターンやて」と申しわけなさそうに言いかえている。

幾らかもたついたが、事故現場の四つ辻へ着いた。小矢部川寄りにその辻の北東の角に、小さな社があるのに始めて気づいた。どれだけその辻を曲がったか知れぬのに、一度も眼に留めていなかったのだ。

その曲がり角にガラスの細かい破片がまだ少し残っていた。

長男は、「ここやな」と確認してから、警察署へ向かった。警察署のなかへ入って行くと、署員が四人いた。長男が、「手良元ですが」と名告れば、その署員のなかの一人が対応に出てきてくれた。

一目で鍛えているのがわかる、がっかりした体躯の若い婦人警官だった。目を見張るほど女丈夫の美人だった。さすが巴塚が建っている町に相応しい。昔から金沢美人のルーツは福光だと聞かされている。

「あゝ、はい、お荷物は全部こちらでお預かりしていました」と云うなり、ナイロンの大きなゴミ袋に納れてあるのを運んできてくれた。長男が受けとり、妻へ手渡すと、なかを改めた妻が、「一平、わたしのバッグがないわ」と叫んだ。

年輩の男の署員が、「それで全部でしたよ。救急車の人から受けとったのは」と云う。

「えっ、ほんとですか」と妻は目を丸くし、血のついた他の物の間をまさぐっている。「それはそうと、ドライブレコーダーの映像を観ますか」と別の署員が云う。

「はい、是非」と長男が答える。

用意された画像を見ると、明らかにこちらの車がすぅーと出てきていた。一旦停止をしている様子も左右確認している気配もない。

「もう一度観てみますか」と云って、再度元へ戻した

映像を流してくれる。何度観ても同じことだと思った。
「わたし等はどうとも言えませんが、保険会社の人が観ればはっきり答えがでるでしょう」とその男の署員が宣うた。これではこちらのミスは一目瞭然で、９対１で決まりである。おろおろしている妻が可哀相だった。
「これからは充分注意してくださいね」という婦人警官の声に「はい」と答え、署員全員に深々と頭を垂れた。
帰り際に長男が、「もし差しつかえがなければ、相手の方の連絡先を教えて頂けませんか」と云うと、年輩の署員が、「和田くん、相手方に電話して、教えても良いかどうか、訊いてみてよ」と婦人警官に指図してくれた。和田さんがすぐに電話をかけてくれ、相手の了解を得て、ケイタイの番号をメモしてもらった。
「お世話になりました」と、みなで礼を云い、警察署を後にした。
「現場へ行って、バッグをさがしてみよう」と、長男は車をとばした。
すぐに現場へ着いた。長男は社の正面の入り口から入っていくと、妻が懐中電灯でなかを照らす。
しばらくして、「あった！」と叫ぶ長男の声がひびき渡った。妻が跳びあがって、「いっちゃん、あったけっ！」と泣きそうな声を挙げた。石柱の間から妻のバッグがひょいと顔を出した。
小躍りして喜ぶ妻の一挙手一頭足が新鮮に見える。バッグのなかを震える手でまさぐる妻が、「あゝ、助かったぁ。みんなあったわ」とこちらを見て拝む格好をしている。
「拝むんはあちらさんやろ」と社のほうへ手をかざす。妻が慌てて、何度もなんども拝んでいる。無理もない。カードやスマホや手帳等、数千円の現金より大事なものが無くなれば、後の始末がおおごとだ。
妻と二人で、小さな社にひたすらお辞儀を繰りかえした。バッグを胸にだき抱えて半泣きになっている妻の、そんなべそをかいている姿を目にするのは何十年振りだろうか。
バッグはそこの神さんがご自分の手元へ引きいれてくださったとしか云いようがない。そんなに巧くバッグが車の窓から霊験の場へ飛んでいく偶然は万分の一の確率もないだろう。人智を超えた計らいだと想った。
その時、不意にひょこんと、ウサギのことが頭に浮かんだ。あの穴うさぎの群れは何だったんだろうか。幻覚だったんだろうか。普通目にする兎とは違って、

穴うさぎという種類のうさぎなのは分かっていた。
何れにしても跳びながらあるいていく、白い集団を見たのは確かなのだ。そのことを妻に確かめるのが恐ろしかった。
長男が途中車を止めて、相手方へ電話を入れた。長男の話しぶりはなかなかきちんとしたものだった。こちらの非を丁寧に詫び、相手の体調を気遣う率直な言葉も、自衛官として外部との折衝が多い部署にいるため、応対の仕方が慣れてるように感じられた。
最初は、「電話をかけて頂いただけで、もうそれで充分ですよ」と言われたが、それではこちらの気持ちが済まないので、相手のお宅へ出向くこととなった。
一週間後の日曜日・午後四時という約束になった。こちらは中学二年生の女の子が稽古にくる時間とだぶらなかったのでほっとした。今時、琵琶などという楽器を自分から習いたい、と言ってくる女の子がいるのは奇跡に近かった。その子が母親に連れられてやってきたのは、小学四年の時だったのだ。
コロナ禍のなかをものともせず、週一の稽古を休まず通ってくる。
ずいぶんと巧くなり、こちらが舌を巻きそうだ。《片耳芳一》となったこちらも、早く《耳なし芳一》とならなければならない。
約束の日曜日、長男の車で福光へ向かい、途中改めて社へ参った。
すぐ隣りの住人が道路の掃除をしていたので、神社の名前を訊ねた。手を休めた翁が、「神明宮と言いますがのぉ」と答えてくれた。
よく見れば、大きな石積みの上に石柱で囲いがしてある社のなかの角に地蔵堂があるではないか。堂内には六体のお地蔵様が赤い涎掛けをして、一体一体違った顔で並んでいた。これでは御利益があり過ぎるほどあったわけだ。だがもしこのお地蔵様を拝んでいる人や通行人の方々がいたとしたら、と思うと身の毛がよだった。地蔵堂の小さな賽銭箱に、丁寧に五百円玉を三個納れて合掌する。テレビで見たのだが、京都ではお地蔵様を大日如来と呼んでいたのを想いだした。
社のほうの賽銭箱は見あたらなかった。
帚を杖がわりにして一休みしている白髪の翁に、「後でこのお賽銭をあげておいて頂けないでしょうか」と、一万円札を一枚出して頼めば、「うん、お任せあれ」と言ってくれた。
そして、「気ぃつけて運転して行きなされや」と声をかけてもらった。

自分が出てきた細い道の出口のほうを見遣ると、確かに一時停止の【止まれ】の標識があった。
後日確かめてみると、その【止まれ】の標識は覆いかぶさっていた枝葉がすぐさまきれいに切りはらわれたらしく、ずんと低い位置にはっきりと見えていた。
そして標識の【止まれ】の【止】が漢字であることに始めて気づいた。更に最近のものには、その下にｓｔｏｐと英字が書かれていることも確認したのである。
これまで普通一種・二種免許で、合計六十年ほどの運転歴だが、一度たりとも【止まれ】の標識を見逃したことなどなかったし、車をポンコツにしなければならないほどの事故を起こしたこともない。
今度の事故の原因を考えてみるに、いつも曲がる所とは違う、もう一本先の角を右折したのが最初の間違いだった。
ところが途中で、頭のなかがいつもの角を右折したと思いこんでしまい、こちらが止まらなければならない箇所がないものと決めてかかっていたということだったのである。縮みはじめている脳がそのように決めこんでいたのなら、【止まれ】の標識や広いほうの道が視界から無くなってしまうのも当然である。もし広いほうの道を一台でも車が通っていれば、手前でブレーキは踏んでいたであろう。
熟知しているということが知らないということを呑みこんで、豆腐屋までの細い道を一本につなげたということだった 逢魔が時でもないのに、車で走る道はこんなふうに頭のなかから消滅することもあるのだ。
後日、【止まれ】の標識があるかないかを確かめに行くと、紛れもなく真新しい標識が立っていた。そして木の枝葉が覆いかぶさっていたのが、綺麗にとっぱられていて、総ての状況が変わってしまった感じがした。
いつも訪れるその豆腐屋の豆腐は田舎臭くて、豆の味に無愛想な酷（こく）があってじつに美味なのだ。【美】と憑くものへ至る道には、時に魔が潜んでいるようだ。
だがこの小路は福光の昔からの、味噌醤油や麹や魚屋など、古き良き風情を湛えた老舗店が並ぶ得がたい区域なのである。
道を間違えるということは、地獄へ行くかどん底へ落ちるか、生死のわかれ目である。真に恐るべしだ。相手方の住所と会社名が入ったナビに導かれて、道の駅の手前の信号を右折し、田舎道をどんどん走る。
才川という地名は福光市街ではないことを現している。ぽつんぽつんと農家らしきものはあるが、ずっと田畑が拡がっている。

三十分も走っただろうか、ようやく、【西田板金】という社名を見つけた。そこは医王山(いおうざん)が福光側へなだらかに下りてきている平地だった。それにしても板金というにしては、車が二台しかなかった。

事務所らしいプレハブ風の平屋へ行き、案内を乞うた。硝子戸越しに、事務所のなかにいるのが、若い男の人だと知れた。

その男性は素早く身を翻して、玄関まで跳びだしてきてくれた。

「あっ、西田さんでいらっしゃいますか」と、声をかけた長男へ、「はい、手良元さんですね」と応じた青年の顔の表情にまずは安堵させられた。柔らかな物腰と云い、優しげな風貌と云い、その両眼に無類の人の善さが現れている。「お父さん、身体の具合はいかがですか」とまず一番にこちらの容態を気遣ってくれた。「はい、何とか軽傷ですみました。それより貴男様のほうはどうですか」と返せば、「軽いむち打ちのようで、馴染みの接骨院の先生にかかっていますが、『すぐに治してやるわい』と笑っていました。後は保険屋さんにおまかせしましょう」とこちらへのさらりとした心遣いが嬉しい。持参した菓子折を出すと、「そんなことして頂かなくても良かったのに……ところでこんな訊ね方をしてまことに失礼ですが、中身は何でしょうか」と訊く。「最中(もなか)の詰めあわせですが、お好きじゃなかったでしょうか」と云えば、「金沢の銘菓でなかったら嬉しいのですが……」とこの青年らしくない物言いである。顔に似合わず、偏固な一面もあるのかもしれない。「金沢ではなく、津幡の銘菓ですけれども」と口籠もれば、「あっ、それならばこの上なく結構です」と西田さんの顔が晴れた。

交換した名刺をみれば、【西田板金・取締役】とあり、「えっ、貴男が社長さんですかぁ、お幾つなんでしょうか?」と吃驚した声をあげてしまった。

「はい、三十二になりました。一昨年父が亡くなったもので、東京の仕事先を辞めて戻ってきたところです」と云う。

「お父様は琵琶の先生でいらっしゃるのですね」と聞きかえすのを受けて長男が、「はい、井波のほうで教室をもっておりまして」と答える。その経緯を説明しながら、「福光でも以前、巴御前の弾き語りをさせて頂いたことがあります」と云うと、「そうですか、金沢ナンバーなので、道に迷われたのかもと想っていましたが、南砺にはご縁のあるお方だったんですね。わたしも市長から色々と文化事業に関して協力を頼まれていまし

て、これをご縁にお付きあい頂くこともあるかもしれませんね」と想わぬほうへ話が展開する。無類の好青年だ。

「車のお仕事をされておられるので、話が早くて助かります」と云うと、「皆さんそう思われますが、実は私の会社は車の板金ではなく、家の外壁などを扱う板金のほうで、私と社員十人ほどで重い物を持ちはこびする重労働な仕事なんですよ」と破顔する。

すっかりうち解けて、話が弾んだ。

帰り際、外まで見送りに出て、こちらの車が見えなくなるまで手を振っていた。

消えた辻の向こうから現れた人たちが何れも好人物だった。

次の日砺波総合病院から電話があった。

「実は腹部や胸部のＣＴも撮らせて頂いたのですが、事故での問題は何もなかったのですけれど、胃のほうの画像に一センチ五ミリほどの影がありまして、もし最近胃カメラをしておられないようでしたら、一度検査して見られたら如何でしょうか」との話だった。

「それはご親切にありがとうございます。早速、胃カメラを呑みにいってきます」と礼を云い、翌日金沢の、浅ノ川総合病院へ行って、いつもお世話になっている、内科医の荒木田先生にその旨告げると、「すぐに診てあげましょう」と予約もないのに胃カメラ室へ連れて行かれた。細胞診もするらしい。

胃カメラが終わり、待合室で一時間半ほど待っていると、「早くわかってよかったですね。初期の胃癌でした。すぐに良くなりますから、心配せんでも大丈夫ですよ。もし砺波のほうで見つけて頂けなかったら、ステージが上がっていくことも考えられたので、本当にラッキーでしたよ。わたしのほうからも向こうの放射線科の先生にお礼のメールを入れておきましょう」と優しく言われた。また一つ、禍のなかの嘉が増えた。

二週間後に手術の日が決まったので、その間に一度二日前に入院し、当日ストレッチャーに載せられてオペ室へと向かった。

「前以て麻酔の先生に処置して頂きますからね」と言う看護師に、それには応えず、「尿道へ管を入れるんですよね。痛いそうですが」とあらぬことを訊ねると、「はい、麻酔が効いてから入れますよ」と軽く返してくる。

「ふにゃふにゃのとぴんぴんなのと、どっちが入れやすいですか」と訊けば、看護師は「そりゃ、ふにゃふにゃのほうに決まってますわ」と真顔で宣うた。胃の

手術で尿道へ管など入れるはずもないのではと思っているが、もしそうだとすれば、こちらの勘違いに適当に応じている看護師の応対もなかなかのものだった。だがやはり尿道へ管を入れるのかも知れなかった。退院までにその事を確かめるのを忘れてしまっていた。

妻に見送られて、初めて内臓の癌の手術へと向かった。南無阿弥陀仏を唱える。

無事手術も終わり、十日ほどの入院で家へ帰されることになった。

その入院の間に、砺波の病院で出会った、あの多動性障害の男の子が母親に付きそわれて、浅ノ川病院の整形外科へ入院してきたのだった。

母親が云うには、「この子はこれで三度目の入院なんですよ。今度は学校の階段から転げおちて、右足首と左手首を折ってしまいましたの。一度目は左足のアキレス腱を断裂して、二度目は腰の骨を折りましたのよ。幸い、頭のほうは大丈夫でしたけども……」と子供の注意力の無さと他の子供たちとの、余りのコミニケーション不足を囁くように嘆くのだった。砺波総合病院では病室が満床の為、浅ノ川病院へ回されたのだそうである。

想わぬ再会だったが、男の子は折れた手足をギブスで固められながらも、ベットの上を這いまわるように動いて、じっとしている様子が無いのだという。

こちらは直ぐに動けるようになったので、整形外科の病室を覗きに行くと、声にならぬ潰れた奇声を発してしがみついてきた。

何だか、自分が男の子の担当医であるような気がしてきた。

年齢にすれば、こちらの孫と云っても良い男の子の、ベットの頭の上の壁に差しこまれているはずの名札が無い儘だった。

「坊の名は本当に無いんだなぁ」と云うと、黙って下からこちらの顔を見あげるだけだった。その視線は静かに燃えている気配がした。「おじさんは今日で退院するけど、坊の様子を観に、時々見舞いに來るからな」と頭を撫でてやる。二人は終始黙ったきり、目と顔の上げ下げで対話した。

病室を出る時、男の子は手をふるこちらに背を向けて、左の手を一度軽く上げて応えてくれた。

母親は玄関まで、妻とこちらを送ってくれた。

病院の前に待機しているタクシーに乗って、何度も手を振っている母親をふり返りながら帰宅したのだっ

た。

妻が玄関の鍵を開けて、「さぁ、どうぞ」と招じいれてくれた。自分の家という馴染み感が薄く、不思議な感覚だった。

居間の炬燵に足を突っこむ。いつ電気が入ったのか、暖かい。

妻が牛乳を温め、黒砂糖を混ぜて炬燵板の上に置いてくれた。一口含む。

「お帰りなさい。どれも良い方向へ向かっていて、良かったわね」と妻が笑顔になった。

「それでですね。この機会だから、一言云わせて頂きたいのですが……」ときた。

呑みこむのが止まった。

「貴男はいつも物事を自分の側へ引きよせてしか話をしませんよね。今度のことだって、事故の分析や解釈をするばっかりで、反省というものが感じられません。助手席に乗っていても、他の車の運転技術を詰って舌打ちばっかり、それに自分にあたわった車なのに、『あこがなっとらん、ここも改良せなだちゃかん』と怒鳴るのを、横で聴いてるあたしの身にもなってみてくださいよ」と諭された。

「最後にもう一つ、一日の最後に、車を車庫へ入れた後、貴男は車にむかって、【今日も一日、ありがとう】と云ってあげたことが一度でもありますか」ときた。

「……」これには返答のしようがない。二階の寝室へ行ってベットへもぐり込んだが、なかなか寝つけそうもなかった。最終の普通列車ががたんごとんと森本駅を出ていく音を半覚半睡の状態で聴いている。

その響き音が消えていくと、「どうしたのぉ、今夜はじっとお池を眺めて……」と女にしては低い妻の音声が階下のほうから聞こえてきた。だれかに話しかけているようだ。

「毎回、居るところが違うのね」

「……　……」

「この前は、あたしの書斎の、用水のすぐ横に居たでしょう」

「……」

「その前は、玄関横の、灯油のドラム缶の脇に居たわよね」「……」

何ものかに話しかけているのは確かなのだが、どうも相手は人間ではないような感じだ。

なかなか寝室へ上がってくる気配がないので、半分開いている玄関の戸を静かに後ろ手で締めて、妻が蹲

っていそうな庭の池まで、音を発てないように歩いていく。

泰山木の葉叢が重なり、その間にぽつんぽつんと白い花が窮屈そうに咲いていて、それでも独特の花の芳香が漂ってくる。

屋根と葉叢の間に月白の空がぼおっとひろがっており、十三夜の丸いお月さんが花の一つひとつと綱引きをしているように、じわりじわりと顔を覗かしはじめた。

池の水面に目を移した時には、もう月の全容が映りこんでいた。望月までのほんの僅かに欠けた月の輪の凹みが幽かに震えている感じがする。

妻の寝間着姿が朧に霞み、池の右手の草叢の手前に黒褐色のずんぐりとした塊がある。

池の縁に置物なんぞある筈もなかった。

僅かな水草が池の形に沿って生えているだけだった。

すっと伸びてきた妻の白い右手がその黒っぽい塊に触れると、ごつごつとした塊の表面をそっとゆるやかに撫ではじめた。

すると、その黒い塊が赤く発色し、目蓋が閉じて一瞬の間に、又開いた。

深い感情の籠もった、緩やかな瞬きに思われた。そしてその黒いものが蟇蛙だと分かった。妻の大好きな生きものだった。

遠くの田圃から殿様ガエルの大合唱が聞えてくる。二人してその声に揺られながら目を瞑っている。白モクレンの花つぼみが五つばかり微かに震えている。

“煌々と十三夜の月が中天にある夜更けに、嫁いできたばかりの妻を軽トラに載せて、目星をつけていた花園村の花畑へ向かっていた。春の花が絨毯を敷いたように拡がっている畑の山際を巡る用水の手前に、小さな白木蓮の木が一本だけ植わっている。

軽トラの荷台からスコップともっこやロープを下ろし、妻の手を引いて畦道を急いだ。

妻は、「ねぇ、こんなことよしましょうよ。やめて頂戴ね」としきりに懇願してくる。

こちらはその言葉を無視して、まだ若木の白木蓮の根元から十センチばかり離れた円周をスコップで掘りおこし、根っ子にまつわりついている土毎、新聞紙を何枚も重ねて布のガムテープでぐるぐる巻きにし、すばやくその若木をもっこに入れると、肩に背負って車まで運んでいった。慌てず堂々とした足取りで前を行く新婚の夫を、新妻が赤い目をきょろつかせながら見ている図が手に取るように分かった。

妻のはたはたと怯えている跫音を背に、農道に駐めた軽トラの荷台へ載せに行くまでの、僅か十五分ほどの時間がすごく楽しかった。ロープで木をしっかり荷台の外にある留め金に括りつけて、何事もなかったかのようにエンジンをかけ、ハンドルの左下のボタンを押して煙草に火を点けた。

そっと音を発てないように助手席へ乗りこんできた妻の息が白く、「早く車を出して頂戴ね。こんな明るい月夜に花泥棒なんて、全く捕まったらどうするのよ」と涙ぐんでいる様子だった。”

今はかなり大きく成長した白木蓮の花が月光に映えて、池の水面にも淡い翳を落としている。

「ねえ、この蟇蛙の名前は何と云うか、知ってる？」と妻が云う。

「知らんよ」と応える。

「蟾蜍（せんじょ）と云うのよ」と妻が言う。

「さぁ、何のこっちゃ？」と訊く。

「お月さんに棲んどるヒキガエルの名前よ」と妻が言う。

「姮蛾（こうが）が西王母の仙薬を竊み月中に走って化する所といふ。月精。転じて、月をいふ」と大漢和辞典にあります。姮娥は弓の名人である羿（ゲイ）の妻ということです」

「そんなこと、よう知っとるなぁ」と妻の博識に感心するふうに云う。

「蛙のことなら何でも調べてあるわ」と誇らしげに答える。

「お月さんには、兎とヒキガエルとが居て、桂の大樹もあるのよ」と云う。

「そうか、それでヒキガエルと穴うさぎが繋がったな」と、心の内で合点する。

そして寝室のサイドボードの上に、ヒキガエルの形をした器物のある意味が分かった。

「それからね、硯の名であり、霊薬の名でもあるのよ。千歳のヒキガエルの頭に生ずる肉角の事らしいのね」

「あんたはそんなことばっかし詳しいがやな」と云うと、「長い年月、この蛙に似た貴男とつれ添っていれば、当然ですわよ」と嗤う。

池面に映った月がいつの間にか欠けていて、既に下弦の月の形になろうとしている。

蟇蛙が喰ったのか、その舌が長く伸びて、月が微妙に歪んで見える。

妻は誰が見てもハンサムな男は苦手で、ずんぐりと太って足が遅い当方と結婚したらしいのだが、元々蟇蛙が好きだったので、こちらのようなヒキガエルに似

た男を亭主に選んだのか、つれ添った後から蟇蛙が好きになったのか、そこのところは分からない。
高校生の頃から詩を書いてきた妻は、「彼女の詩には佇まいがある」と敬愛する詩人に誉められたことを一番の宝としている。
「姮娥(コウガ)はわたしでもあるのよ。夫の羿(ゲイ)が西王母から譲りうけた不老不死の妙薬をひとり占めしようとして月へ逃げこんだので、その報いの為に人間は死ななければならなくなつたと云うの。美女だった姮娥は醜いヒキガエルの姿に変わってしまい、月面のヒキガエルのような陰翳は実は姮娥の姿なのよね」とベットへ戻って、妻が説明する。
「と云うことは、満ち欠けをする月も、冬眠を繰りかえして生きるヒキガエルも、不死の象徴になると云う話なのかな」と訊けば、「わたしはたいして美人ではないけれど、ずっと雌のヒキガエルになりたいと思ってきたのよ。でもそう思わなくても、どちらから歩みよるにしても歳を取れば、夫婦は似た者同士になると、そうなるわね」と宣う。
妻は冷えきった足をこちらの太股の間へ差しいれて、「若い頃はこうして足を温めてもらったわね」と足の裏と甲を頻りに擦りつけてくる。だが今はもう当方の内股はさして温もりは無い。
「さぁ、もう寝よう、風邪引くぞ」と妻を促せば、「先に行って」と云う。
玄関口の灯りを点けたまま鍵を掛けずにベッドへ戻った。浅い眠りのなかで、**どぼーん**という大きな水音がした。慌てて池のほうへ走っていく自分の姿がどこか哀れに思えた。
池の面には幾つもの波紋が拡がっている。妻の姿が見えず、名を呼びつづけていると、
波紋が消えた水面に巨大な月が写っていた。
その月面に妻の姿が望まれたと思った瞬間、天空の月面へ金色の火箭となって奔る妻が見えた。必死に手をふり、妻の名を叫びつづけたが、詮無いことだった。
その自分の大声で目が醒めた。
妻の姿はまだ横のベットにはなかった。台所へ行って、牛乳をごくごく飲みほした。ほっと一息ついて、テーブルのほうへ目をやると、見慣れない染め付けの大皿に、白い布巾が掛けてある。
布巾をとって見れば、半紙の掛かった一塊の虚きなフライがあった。
半紙には妻の字体で文言が書かれていた。
【しばらく友達と旅行に行ってきます。わたしのおっ

ぱいをフライにしましたので、召しあがって下さい。半世紀以上に亘って、貴男に吸われ続けたわたしの右のおっぱいが余りに垂れさがってしまったので、美容外科で左のおっぱいと釣り合いがとれるようにしてもらいました。本来なら子供たちの為のおっぱいなのに、貴男が独占してしまったのは、大変な罪作りですわ。でもそんな貴男の云うままになってきたわたしも同罪ですけどね】

慌ててフライをナイフで切ってみたが、七面鳥か鶏の胸肉のようなフライのどこにも、妻の乳輪や乳首は見あたらなかった。

「今は切りとったりせんでも、脂肪の吸引をすれば、片づく筈だろうが……」と情けない繰り言が口をついて出た。

妻の乳首がフライのどこにもないので、彼女が返ってこないとは思ってもいないような口吻が、お目出度い男と云われる要因かも知れない。

独りになった自宅はひっそりと鎮まりかえって、自分の肉体から出る生身の気配も消えているようなのが無性に侘びしく辛かった。その所為でという訳ではなかったが、なかなか独居生活に馴染めずに、二日後、面会時間を確認して、坊の病室へと向かった。

ナースセンターで、パソコンの前に座って両手の指をピアノの腱板を叩いているかのように動かしている看護師に声をかけると、「あら、手良元さん、退院したんじゃなかったんですか？」と手を止めた。

「今日は西病棟の病室に入院している坊やの見舞いにきたんですよ」と面会を申しこむ。「あぁ、あのせわしないお子さんですね。おかぁさんほうは今、丁度お風呂を使っていらっしゃるところですが、もうじきに上がられると思いますわ」と答えてくれた。

「それじゃ、お部屋で待たせて頂きますね」と云うと、「原則、十五分ということになっていますが、宜しいですね」と片目を瞑る。一番端っこの部屋の名札が掛かっていないドアを少し開けてみると、二人部屋の窓際のベットの上に、仰向けに眠っている男の子の姿が見えた。

手前のベットは母親が使っているようで、院長を兼用しておられる荒木田先生の手配りがなされていると思われた。

しばらくして、母親が上気した顔をして、髪の毛を拭きながら入ってきて、「あら、いらしてらっしゃったのね」と恥ずかしそうに身体をくねらせた。

「よく眠ってるみたいですよ」と男の子の頭に手を置いて、そっと撫でてやる。
「目を覚ますと、また大変ですから、休憩室へ行ってコーヒーでもお飲みになりませんか？」と誘われる。
二人で休憩室のテーブルに向かいあって座り，缶コーヒーをちびちびと飲んだ。
「ご主人はどうされてるんですか？」と問えば、「この三月に亡くなりました」と云う。「ご病気ですか、それとも事故とかで……」と云えば、「はい、主人は営林署の臨時『特別職』として採用され、春と秋の年二回、山へ入っておりましたが、杉枝の伐採中に高いところから落ちて、脊椎や脚腰や腕の骨やら、全身の骨を折ってしまいましたの。何十年もやってきた慣れた仕事でしたが、足を置く枝が腐っていたのを見誤ったという、あり得ないミスでした。手長猿のように高い枝から次の枝までとび移って、その勇姿は人間離れしておりましたわ。通常は仲間の職人さん達と同んなじに命綱をつけていたのに、いつの間にか主人は山刀を携えただけになっていましたの。あたしはその姿を放送局のカメラに撮れたのを観た時、やっぱり自分が烏天狗か手長猿と夫婦になっていたのだと確信しましたわ」と赤い目をして話すのでした。

幸いどうにか労災扱いにはなって、何とか三人で生きていくことは出来そうだと云うのだった。
その後、二、三日おきに、病室へ顔を出すうちに、男の子の手足の状態はどんどん良くなっていき、一ケ月ぐらいでギブスがとれ、櫻が満開になる頃には退院となった。
新しい車が用意されたので、それに二人の荷物を積んで、ひとまずは福光の自宅へ向かった。軽四のダイハツ・タントの中古車は八十万円だったが、保険から五十万円が出て、残りの三十万円がこちらの支払いとなったのだった。妻はほっとして何度も、「有り難いわ。有り難いことだわ」と胸を撫でおろしていた。後に知ったことだが、相手方へは、保険から二百五十万円が出ていたのだった。相手方が物損事故で済ませてくれたので、こちらも随分と助かり、こちらの次男と高校時代から仲のよかったネッツ・トヨタの津幡店店長が、何かと骨を折ってくれたに違いなかった。
福光の家は町中から外れた、小矢部川上流にある神社の敷地内にあった。神社の横を流れる川の縁からイチジクの畑が拡がり、山から流れてくる川に沿うて頂きまで曲がりくねった砂利道がつづき、山膚のあちこちから湧き水が溢れでていた。平屋の、四阿か納屋と

いった感じの小さな余りに粗末な、板葺きの屋根に河原の石ころが何段にも規則正しくのっかっていた。
玄関の鍵穴に平たい銀色の鍵棒を差しこんで、母親が力一杯引き戸を開けようとしたが、ぎうぃーっと軋むばかりで、簡単には開かなかった。すると、男の子が左の足先で、戸を幾度か蹴った。
母親が、「またそんな乱暴なことをしてっ！」と叱りつけ、「足の怪我が直ったばかりでしょうが」と口籠もった声をしきりに呑みこんでいた。
すかさずこちらが、「ボクに任せて下さい」と云うなり、引き戸にしがみついて、二、三度ゆすってから、腕の力を抜いて左のほうへ引き戸を滑らせた。あっさり玄関の戸は開いてくれた。頭に刺さったガラス片を宥めた気分になっていた。
男の子が真っ先に跳びこんでいった。
薄暗い部屋のなかで紐を引っぱる音がして、明るくなった障子に小躍りする子供の影が木偶人形のように映った。
三和土を上がって、狭くるしい廊下を左へ行った突きあたりに便所があり、少し離れた場所に風呂場があった。六畳と八畳の日本間を廊下がとり囲んでおり、神社の池を目の前にして流し場があった。池の水は谷川から引きいれられているらしく、うす蒼く透明な池の縁（ふち）は白と赤の曼珠沙華に彩られ、土塀に連なる夾竹桃の白やピンクに抗うように植わっているサルスベリや梔子や金木犀等の花の香りが入り乱れて鼻がくすぐったくなってくるほどだった。
流れこむ谷川の水は池の水を常時洗浄し、浄化された水は流し場や風呂場へも入っているのだった。
水道の蛇口から細い鏈となった水が滴りおちている。その澄んだ音が聞こえるような聞こえないような幽かな囁きとなって、使いこまれた砥石の表面に時空を超えた凹みを穿たんと、その動であり静でもある一瞬のつらなりだけがこの粗末な家屋を崩さずに保っている。余計な言葉にしてみれば、その静音が廊下をめぐり回って消えてしまう。
母親の姿が見えないので、「奥さん、どちら」と呼んでみる。「こちら、こちらよ」と風呂場のほうから、生白いおんなの左手指が空気の層を櫂でいる。
「何してんですか？」と訊けば、「お風呂を沸かしてます」と返事が返ってくる。
風呂場へ行き、戸を開けてなかを覗いてみると、五右衞門風呂の丸い蓋の隙間から湯気が発っているように見えた。

開いたガラス窓の外から、薪に燃えうつった焔のはじける音が聞こえてくる。
「薪をくべているんですか？」と訊けば、火吹き竹に空気を吹きこむか弱い息遣いがしきりに響いてくる。
「ボクがやりましょうか？」と今度は強い口調で云えば、「あたしのほうが慣れていますから」とおんながはっきりと拒絶してきた。
「あの子の相手をして遣って下さいな」と命令する語調が、ぱちぱちと薪の燃える音に被さる。それ以上云うことも無くなって八畳間へ戻れば、男の子が素っ裸になって、剥げかけた壁に逆立ちをしていた。幼いチンポコが束になつた真新しい五寸釘のように突ったっている。
「まだ風呂は湧いとらんぞ」と放った自分のすっとんきょうな声が捻れて飛んだ。
「すんに湧くちゃ」という間に逆立ちから元の立ち姿にもどり、股間の五寸釘は子供なりのぴんとした肉棒に変わっていた。
何枚かに別れてる蓋を外していくうち、忽ち湯気がたち昇り、服を脱いで浮いている底蓋に両足を載せてずぶずぶと身体を沈めていく。熱いお湯が五右衞門風呂を巡り、丁度良い湯加減になっていった。いつの間にか無精髭が伸びている顎の下に男の子の頭があり、どうやら両足でたち泳ぎをしているらしく、足先がこちらの下腹から股間へとんとんと熱い湯の塊をぶつけてくるようだった。
「父ちゃんともこんなふうに、いつも一緒に風呂へ入ったんだ」と口から湯を吐きだしながら楽しそうに云う。
ぱたりと風呂場の扉が開いて、仄かに柔肌の匂いがしたかと想えば、小さな手桶が目の前を斜めに過ぎり、何度か身体に湯をかけていくようで、膚の香りが湯殿一杯に籠もっていく。こちらの戸惑いがそれにつれて弥増していく。
「父さん、あたしも入るね」と云うなり、こちらの背後へ滑るように膚を擦りつけてずるずる浸ってくる。
男の子がおんなとこちらの間に挟まり、より忙しく手足を動かす。
「もう上がるよ」と背中が焼けそうになって、二人から身体を引きはがして湯殿から跳びだしていた。汗が頭から顔へと滴りおち、「ぜいぜいはぁはぁ」と喘ぎつつ、蒲団の上を転がっていく。背中がひりひりと熱い。二人から、父ちゃん・父さん」と呼ばれたのが本当の父親と夫になったように想えてきた。

裸のままの男の子の頭をバスタオルでごしごし拭いてやり、素っ裸のおんなもそのタオルで自分の髪も背面も尻も左右の肩越しに手早く拭きおわれば、青白かった素肌がぽっと赤らむ。おんなは胸に巻いたバスタオルで前のほうも隠して、倒れ込むようにこちらの背後へ横たわってきた。

男の子は一足先にこちらの腹に自分の尻を擦りつけてきていた。おんながこちらの身体を跨いでやってきた。脱いだタオルをまだ汗を滴らせているこちらの頭から足の先まですっぽりと覆った。

バスタオルが勢いづいてきた。三人の上を跳びはねていく。波立つかの如くに撓んでいる。その下の岩床が透けて岩海苔が見える。

「あの夫(ひと)が木の上から落ちて仕事ができなくなっても、一度たりとも口には出さなかったけれど、労災扱いになったことを悔やみに悔やんでいたのを、あたしは誰よりも良く知ってたわ。あたしと息子のことを思えば、労災など要らないとは云えず、自分の恥を曝すような労災扱いを蹴ることもできず、烏天狗になった特別職の誇りにかけて死ぬほど悩んでいたのよ。そして毎日一升酒を呑んで暴れまわり、あたしの身体を蹴ったり撲ったりいたぶり続けたわ。酒が切れると、今度は猫なで声を出してあたしの身体を抓りだすのよ。それが痛いの何のって、親指と人差指の皮であたしの膚を所構わずにさっとねじり抓るのよ。それはそれは抓りの名人なのよ。力なんぞ入れているんじゃ無いのね。一瞬、二本の指の皮と皮であたしの膚の一点を挟むだけなの。でもあの凄まじい痛さも今では懐かしいから不思議なものだわ」としみじみした口調で話すのでした。

ようするに、その木から落ちた手長猿はとうとうくも膜出血で、此の世とおさらばしてしまったのだという。

こちらがその後をひき継ぐことになった証に、自分でもびっくりするほど云ったつもりもないし、思ってもいない言葉が口を衝いて出ているのだった.

「儂がいくら山女魚が好っきゃさかい云うて、ほのでっかい山女魚が儂の釣り針に掛かってくるとは因果なこっちゃとこいの。五十センチ近い大山女魚を引きずり上げた時にぁ、肝が潰れてしもうたがい。お前を入れとく水槽もないし、仕方がないんで宮司に一言断ってから、池のなかへ放してやったんじゃ。夜更けて池のほうから、どぼーん、じゃぼーんと撥ねる音が何日も聞こえてきて、儂を呼んどるがは分かっとったんじゃ。或る夜更けに、宿を貸してもろうとる神社の寝所

の窓を、「あのぉ、申し、もうし」と叩く女の声がして、そっと窓を開けてみれば、若い女の顔が現れて、「ずっと山路を歩いてきて、足を挫いてしまい難儀しております。どうか一夜の宿をお願い致します」と云うではないか。こうした展開になりゃ、昔からとんでもないおっとろしいことが起こるに決まっとると直感したんじゃが、お前のあんまり凋れた哀れな姿にとうとうほだされてしもうてなぁ。また宮司に訳を云うと、「あぁ、あんたさんさえよけりゃ、なんぼでも足が良うなるまで置いてあげまっしの」と二つ返事で了解してくれたんじゃ。どうにか坐ったり膝を立てたり出来るまでになると、神社のどの部屋も遺さんと掃除し、お前はいつの間んにゃら、儂の女房のようになってしもうとった。儂はお前があの大山女魚の精やないかと思うとったよ。儂はお前を初めて抱いた夜、お前の魚体に馬乗りんなって、儂の固うなった山刀で、お前の魚体を腹の下から割いて、人間の身体に直しておったとこいの。ほしてお前の出来たばっかしの裂け目へ儂の真っ赤に燃えとる刀を突っこんどった。ほれからいうもんな、お前を抱くたんびにお前のあの美っしい宝石みたいな丸い斑点を消そうとして、お前がのたうち回って痛がるがも構わんと、抓りつづけたんじゃよ。そうして仕舞いにゃ、儂の指の皮が剥がれるほど薄うなった時、お前の魚体から全部の斑点が亡うなっておったんじゃよ。そん時を境に儂の精力は枯れ果てて、お前を抱こうという気が失せてしもうとったんじゃよ」と儂とお前という言葉ばっかり響く。夢の中を漂っている気分だ。

遠い空の彼方から降ってるような声を、自分の耳ではない耳で聴いている。

朝の蒼い光りが目を染めていた。蒲団のなかにはこちらが独りっきりで、女と男の子はいなかった。

炬燵板の上に書き置きがあった。薄茶色の半紙に、“いつものように、息子を連れて医王山へ山菜と薬草取りに行って参ります”と筆でしたためられた女文字が、目醒めたばかりの目に眩しかった。

これでもう母親と男の子には逢えないような気がした。風呂場へ行ってみたが、五右衛門風呂に水気の気配は残っていなかった。

半紙の最後の余白に、“そのうちに、又寄ります”とサインペンで書いた。

自宅へ戻ると、居間のほうから電話の鳴る音が聞こえてきた。

小走りに駆けて行って、受話器を取る。

耳管のなかで海鳴りの音に混じって、妻の静かな細い声がきこえてきた。「あぁ、貴男、居らしたのね、夕方までには帰りますから、鯖寿司を買っていきますので、楽しみに待ってて下さい」と電話の向こうで、ぷつんと声が途切れた。

黄昏の夕闇迫るなか、玄関のチャイムが鳴り、妻が帰還してきた。

「ただいま」という声に被せて、「お帰り」といつもより元気な声で迎える。

「あんな手紙を読んだんで、あんたはもう帰らんかもしれんと思うとったよ」と云えば、妻が、「わたしは結婚して、歌の文句じゃないけれど、貴男が七年目の浮気をして、若い女と出ていった時も、じっと貴男を待ちつづけていたわ。時間軸を繋ぎあわせていく散文家の貴男が詩を書いてきたわたしよりも、その時間軸を切りさいて迸りでる亀裂音を、無意識下の韻文の響きと重ねているのを知っていたからこそ、二人の息子と姑さんとで家を守ってきたんですわ。わたしは貴男と死ぬまでつれ添いますからね。七五調の琵琶歌も好きです」と微笑みながら、鯖寿司を染め付けの大皿に盛りつけていくのだった。

了

参考文献

『百田弥栄子氏の『中国の伝承曼荼羅』には、中国では月に蛙が住んでいるという伝承があり、前漢の（淮南子）や東晋の（嫂神記）、南朝宗の（後漢書）にも記載されています。前漢時代の馬王堆第一号前漢墓の帛画には天上界の弓張り月に蛙が描かれているし、やはり漢代の郭氏墓石祠の石刻天象図には大陽に住む烏と月に住む蛙が描かれています。この月に蛙がいるという思想は太陽に烏がいる思想と共に日本に入ってきており、天皇の即位式に紫宸殿前を飾る“月像幢”には兎と共に描かれた蛙がいます。

正倉院御物の弦楽器“桑木院咸”の腹板には、臼を搗いている兎と蛙が描かれています。

京都の仁和寺の「別尊雑記」には、三足の烏がいる太陽と、兎とヒキガエルのいる月を両手にかざし持つ、北極星を神格化した妙見菩薩（中国では北斗真君）を中心し据えた別尊曼荼羅が記されています。』

又「淮南子・説林訓」では

月照天下，蝕于？諸。螣蛇游霧，而殆于蝍蛆。鳥力勝日，　而服于雛礼，能有修短也。という文がある。

まず「月照天下，蝕于？諸」とあるが、「蝕？（せんしょ）」はすなわち“蟾”（せんしょ），であり、ヒキガエルのことであるときれる。

淮南子のこの文は「月は天下を照らし、？諸（せんしょ）が蝕（むしば）む」と読めるが、これは月の“蝕（しょく）“が？諸の活動によって引き起こされている内容である。蝕（むしば）むは文字通りの月蝕（月食）、あるいは月の満ち欠けを指すと考えられる。

ヒキガエルが月を食べているというのが、その当時は月蝕だと思われていたのでしょう。

［後漢書、張衛傳］［淮南子、精神訓］［後漢書、天文志、註］［論衛、順鼓］［韓愈、毛頭傳］［李白、朗月行］［趙番、月中桂樹賦］［故事成語考、天文］等が、【諸橋・大漢和辞典１０巻】に記されていた。

因みに、岩波書店「中國詩人選集7・竹部利男註下」に載っている、李白の「古朗月行（ころうげつこう）」という詩は左記の如くである。

小時不識月
読作白玉盤

小時（しょうじ）月（つき）を識（し）らず
読（よ）んで白玉盤（はくぎょくばん）と作（な）す

又疑瑶台鏡
飛在青雲端
仙人兩足垂
桂樹何團團
白兎擣薬成
問言與誰餐

蟾蜍触圓影
大明夜已残
羿昔落九烏
天人清且安
隠精此綸惑
去去不足観
憂來其如何
捜搶摧心肝

又た　疑う　瑶台の　鏡
飛んで青　雲の端に在るかと
仙人　兩　足を垂る
桂　樹　何ぞ団　団たる
白兎　薬を擣いて成る
問うて言う　誰に与えて餐

しむるかと

蟾　蜍は　円　影を　触　し
大　明　夜　已に残く
羿は　昔　九　烏　を　落し
天　人　清く且つ　安し
陰　精　此に綸　惑
去　去　観るに足らず
憂　來って　其れ如何
捜　搶　心　肝を　摧く

小さい時、月が何であるか知らなかった。白い玉のお皿と呼んでいた。そしてまた、瑶台にすむ仙女の使う鏡が、空を飛んで青い雲の端に引っかかっているのかと思った。よく見ると、仙人が両足を垂らしていた。桂の木が何ともこんもりと生いしげっていた。白うさぎは仙薬をついて作りあげるが、「いったいだれに食べさすの。」などとたずねものだ。

だが、月の中にはヒキガエルがすんでいて、月の丸い影をむしばんでいる。そのため、大きな光明が夜中に欠けてしまう。大昔、十個の大陽が現れたとき、弓の名手の羿が、九羽のカラスを射落とし、天は清らかに、人々は安らかになった。ところが今や、陰の象徴である月がほろびようとして、しだいしだいに見るかげもない。うれいのおこるのを何としょう。いたましさが心をこなごなにする。

合評会案内

一、日時　二〇二五年　五月十八日（日）
　　午後二時二十分

二、場所　富山県民会館　六〇八号室
　　富山市新総曲輪四番一八号
　　TEL（０７６）４３２-３１１１

読者方々のご出席を歓迎します。

笑い　他

深井　了

笑い

ワハハハ、オホホホ、と言う声がしていました。それは、私の頭の中の一室で、右上の方にあり、色々な眼鏡が光っているのでした。太い首が笑い皺になり、また笑って、眼は泪のような油が油ぎり、そして唇が厚く笑っているのでした。

私は俯き過減に歩き、それは足を探しているからで、女の足を求めているからで、太い足がスリットの間から白く歩き、若い娘で、私は今しも、その柔らかな足を

抱きしめるように見ているのでした。女の子は、足速に、それでも私には気付かずに、通り過ぎ、残りは枯れたようなつくんと立った足ばかりが私と一緒に歩き、また向かって歩いてくるのです。

世界の歌

世界は
国のまた国の向こうに
或いは
星のまた星の向こうに
あるわけではなく
人の横顔の
茶色の凹凸を
ほんの少し通り抜ける所にあるのです。

命

「私は自分の命を」と私は言い掛けて立ちどまりました。私は自分の命をどうしたのだろうとふと考えましたが、その一人言の意味は自分にはわかりませんでした。私は自分の命をどうしようと言うのだろうか。自分の命をどうしたのだろうかと考えましたが、その一人言の答は出て来ませんでした。ただ私は、自分がいつの日からか、一人言を、しかも何の意味もない言葉の切れ端を発作のように吐き捨てるのです。

震え

私は体が震えるのを覚えました。それは背骨のあたりからで、思い出してはいけない記憶が、ふと顔をもたげ、それを抑えこむために、体が反射的に震えるのでした。そんな記憶はもう幾つになるだろうかと思いました。たいていがよく考えればつまらないことで、恥ずかしい思いをしたことなどで、自分の体がこんなに発作のように震える程のことではないと思いました。小さな頃からこうで、ただそのころはそれらの記憶は三つ位だったのが今は百位で、そのころは一月に一度か二度しかこういうことが無かったのに、最近は一月に二、三回はあると思いました。

因果が廻る二月の季節

詩人が余りにも深い意味を描こうとして、
つまり
道に落ちていた鉄の棒を
腰をかがめて
その重さを味わおうとした時、
吹雪が
花のように散り始め
「おお、
　神よお赦し下さい。」
と空念仏を唱え

それから
二言三言ぶつぶつと
昔の女の細い腿を思い浮かべながら
少し唇に笑いまで浮かべて
それが本当に赤く見えて
敗北の後悔を自分の罪にすり変えて言う
時、
もう一度吹雪が散り始め
「おお、
　神よお赦し下さい。」
詩人は今も歩いている。

形而上学的な笑いを浮かべる女

お前の笑いは
神に突き抜けて
私の頭を突き抜けて
私はその度に
一度寝たきりの
変哲もない日の
日曜日の思い出を齧るが
おお、その白い肉体よ

お前の笑いも

その白い肉体から発せられなければ
それは何なのだろう

眠れぬ夜のなぐさみに詩を書いて

眠れぬ夜のなぐさみに
　　詩を書いて
笑い転げれば
子供達が目を覚ますので
また
心臓に悪くないようにと
また
余りにも空まわりで
脳がいつまでも動いていることのないよ
うにと

少し思考に重みをつけ
その重みに
柔らかな疲労が
時々生じる
わけのわからぬ言葉に
あれは痛恨なのだと
蓋をかぶせながら
脳の動きにゆっくりと
重みをつけ

私はいつまでも
詩を書いている夢を見ていた。

白い夢

北国の
毎日　雨と雪ばかりの
季節の中で
手に持った外套の
裾を引きずるように
生きている男がいます。
俯いた眼は充血し
時々発作のように笑いますが
そして、その度に
鼻の穴が少しづつ
大きくなっていくのですが
しかし、それは決して
他人を笑うからではありません。
自分をただ笑っているだけなのです。

その男の好きな言葉は、
「自由」で、
彼は平坦で圧力の強い
日常生活の中に
小さな穴を掘り、
一日一回
足をかがめて

膝を抱いてそこに坐り込みます。
そんな男でも
時々
白い夢を見ます。

しがみつく（完全版）

内角秀人

四月八日。試合開始一時間前の午後零時。僕は高岡東部球場三塁側にある記録室に入った。

「あ、山元さん、お疲れ様です」

今日のサブ担当加山さんと配信担当の池谷君はすでに来ていた。僕はメイン担当席に座り、一息つく。

今日から、いよいよ新シーズンが始まる。今年の富山サンダースはどうだろうか。オープン戦では好調だったみたいだ。僕はオープン戦の戦績をネットニュースで知っていた。リーグ事務局からは、オープン戦でもシフトに入ってもらえないかという要請があったが、断っていた。手当が出ないからだ。

僕はジャパンベースボールリーグ、通称ＪＢリーグの富山地区公式記録員だ。富山地区公式記録員は現在五名いて、シフトは一カ月ごとに組まれる。まず全記録員が勤務希望日を提出し、記録部部長の源田さんがそれを元に地区ごとに調整して決める。僕は常に全日ＯＫにしていた。少しでも稼ぎたいからだ。ただ、その分責任が重く、気苦労も絶えない。

僕はこの仕事にリーグ創設初年度から従事していた。彼此十一年になる。その間に、選手の顔触れが大幅に変わった。僕は来る途中の球場売店で買い求めた選手名鑑を取り出し、パラパラとめくってみる。富山サン

ダースのページで手を止めた。今年は例年以上に選手が一新され、十四人も入れ替わっていた。外国人選手も七人と多くなった。吉原監督は変わっていない。今年で就任四年目になる。コーチ兼任野手の矢野も残留。初年度からずっといる。

「今日のスタメンです」

記録室の右隣り、放送室にいる球団スタッフの益山さんが小窓を通して、今日のスターティングメンバー表を差し出してきた。僕は受け取り、早速記録用紙に書き写した。それから用意されている仕出し弁当を食べ、試合に備えた。

今日は曇っていることもあって、記録室の中は薄暗い。試合中照明を点けることはできないので、今から目慣らしのため点灯していない。試合中照明を点けることができない理由は、照明の光が選手の目に入ってプレーに差し障りがあるからだということだ。構造上、欠陥のある球場だと思う。それだけではない。観客席がせり出していて、記録室からはレフト線の奥がまったく見えない。放送室にあるモニターに頼るしかない。大した球場だ。二年前オープンしたばかりだというのに。きっと野球を知らない者が建築設計したに違いない。

試合開始十分前。グラウンドでは開幕セレモニーが行われていた。気が引き締まってきた。今年はどんなシーズンになるだろうか。無事で良いシーズンになればいいが。軽く身震いした。

両チーム整列。国歌斉唱。挨拶。選手たちは一旦ダグアウトに引き揚げ、進行役の紹介に合わせてスターティングメンバーが各々のポジションに散った。

先発ピッチャーはハリオス。昨年まで九州のＮＰＢ球団に在籍していたベネズエラ人選手だ。

「開幕の先発は中柳にして欲しかったですねえ」

加山さんが呟く。

同感だ。栄えある開幕戦には日本人に投げさせて欲しかった。それとも、あくまで勝ちにこだわった選手起用なのだろうか。とすれば、今年に懸ける吉原監督の意気込み、優勝を狙う本気度を感じる。富山サンダースは昨年、前期後期とも優勝を逃していた。

始球式の後、プレイボール。僕は主審の動作に合わせ、スマホを見ながら、

「試合開始、十三時ジャスト！」

と叫ぶ。記録用紙に時刻を記入した。

ピッチャーが投げた。

「ストライク」
僕はボールカウントを、一球一球声を出しながら記入する。いちいち声を出すのは自分自身確認するためだ。そして、選手のプレー一挙手一投足に目を光らせる。イニングが終わると、ピッチャーの投球数をカウントする。得点を書き込む。
試合を記録しながら、今日は紛らわしいプレーが出ないよう祈っていた。記録員をやっていて一番悩むのはヒットかエラーか微妙な打球が飛んだ時だ。十一年やっていても、ジャッジに迷う時がある。それでもどちらか瞬時に選択をしなければならない。その後は、不利な判定をされたチームの監督が怒鳴り込んで来はしまいかとビクビク怯えている。記録にクレームをつけられるのは嫌だ。自分がとてつもないミスを犯したような気になるからだ。
近年はそれでもクレームをつけられる回数が減ってきた方だ。リーグ創設初年度は酷かった。記録員の技量不足、経験不足もあったが、毎試合毎試合必ずといっていいほどクレームをつけられた。中にはクレームをつけることが生きがいのように振る舞う者もいた。
特に酷かったのは新潟アルビスの監督だった藤田(ふじた)。自分のチームが負けていると、試合後半記録室に来て、些細なことをネチネチとクレームをつけてきた。そんな暇があったらチーム強化の策でも練っていればいいのに、と僕は心の中で思っていた。新潟アルビスは初年度四チーム中、ぶっちぎりの最下位に終わり、藤田は辞任した。
五回裏が終わると、グラウンド整備の為、長めのインターバルがある。その間に僕はトイレに行って小用を足す。弁当の殻を捨てに行く。席に戻り、まだ時間がある時はスマホでＮＰＢの贔屓チームの試合速報を見た。
今日の試合はこれまでのところ。０対０の投手戦が続いている。記録をつけるのが楽でいい。もっとも各球団エース級のピッチャーが投げる開幕戦から乱打戦なんかになると、シーズンの先行きが思いやられる感がするが。
グラウンドに目を遣ると、球場スタッフとともに富山サンダースの控え選手が入念な整備を行っている。それと同時に、三塁側ファウルエリアでファンサービスの為の簡単なアトラクションも行われている。進行役がオーバーアクションで場を盛り上げようとしていた。

試合再開。僕は再び集中した。後半は選手交代も頻繁に行われるので、より一層試合から目が離せなくなる。

富山サンダースが六回裏に2点先制した。一方対戦相手の福島ホースは七回表に3点取り、逆転した。試合はそのまま2対3で九回裏になり、福島ホースはクローザーを出してきた。球速のあるサウスポーだ。富山サンダース、追いつき追い越すことができるか。記録をつけながら見守っていると、この回先頭の五番バッター長岡(ながおか)が初球を強振した。打球はライト後方へ。そのままライトスタンドに消えた。同点ホームラン！

打った長岡は大喜びでダイヤモンドを一周する。僕も興奮した。加山さんと池谷君も同様らしい。延長戦になるのか。まだ試合開始してから制限時間の三時間十分は経っていない。時間はたっぷりある。と思っていた矢先だった。六番バッター田端(たばた)も初球を打った。打球はまたしてもライト後方へ。二者連続、逆転のサヨナラホームランとなった。開幕戦から凄い試合になった。今年は波乱含みのシーズンになるのかもしれない。

「試合終了、十五時四十七分！」

興奮冷めやらぬ中、僕はスマホを見て叫ぶ。部屋の照明を点けた。

「お疲れ様でした」

引き揚げてくる審判に頭を下げた。

「今日の警告は？」

僕は主審に尋ねた。主審は両手でバツ印を作る。無し、という意味だ。

僕たち記録員は、試合が終わったここからが忙しい。記録の集計をしなければならない。ただ今日は投手戦で、ややこしいプレーもなかったことから、簡単で済みそうだ。

集計が終わると、サブ担当の加山さんと読み合わせをした。間違い、記入ミスなどなかった。集計終了時間を記録用紙に記入した。

メイン担当の僕の記録用紙を益山さんに渡した。スキャンしてコピーしたものを僕は受け取った。それで一日の業務は終了だ。

仕事が終わると、僕は記録員の仲間や球団スタッフとの雑談を早目に切り上げ、そそくさと帰る。別に急ぎの用事があるのでもない。何か家に早く帰らなければならない理由があるのでもない。いつまでも残って

いると、クレーマーと遭遇するかもしれないからだ。クレーマーの応対は本当に煩わしい。記録を訂正することになると、手続き上、面倒臭いことにもなる。だから僕は早足で帰っていく。逃げるように帰っていった。

三連戦は身体に堪える。自宅のある富山市内で試合が行われるのであれば移動に時間を取られないのでそれほどでもないが、高岡やその他の地域で行われる時はしんどい。その上僕がメイン担当で、配信担当と二人だけの時は非常に神経を使う。試合中気を抜くことができない。逆にサブ担当の時は気楽だ。記録の責任をそれほど負わなくて済むからだ。今回の三連戦はメイン、メイン、サブだった。

富山サンダースは三連勝した。

「ボールフォア！」

主審の手が上がらない。これで三連続フォアボールだ。ゴールデンウィークに突入した四月二十九日の一戦。富山サンダースはアルプス球場で信濃セローズと対戦していた。

タイムがかかり、富山サンダースの投手コーチ原田がマウンドに駆け寄る。キャッチャー、内野陣も集まる。七回表、４対９の劣勢、ツーアウトながら満塁。ピッチャー交代かとも思われたが、続投。連戦だから戦力を少しでも温存しておくために替えないのだろう。

お粗末な試合だった。観るに堪えなかった。両チーム合わせて四死球を十五、エラーを三つずつ記録していた。試合時間は長引き、四時間近くに及んだ。こんな試合をやっていたら、お客に逃げられてしまう。小雨の降る中、今日の入場者数は百五十六人。ＪＢリーグの上村代表もさぞや嘆いていることだろう。こうなったら、勝敗は度外視だ。試合が早く終わることを僕は願っていた。二時間半で終わっても四時間近くかかっても、支払われる賃金は一緒だ。

この日、富山サンダースは5対12と大敗した。

益山さんがやめた。

ここ数試合姿が見えないと思っていたら、家庭の事情ということで退職したらしい。

シーズン途中、しかも始まったばかりのこの時期にやめられると、試合の運営に支障をきたす。しわ寄せ

が記録員にも波及するだろう。今まで通りの進行というわけにはいかなくなるかもしれない。球団スタッフのペコちゃんが孤軍奮闘しているが、まだ入社二年目、二十歳そこそこの女性社員にとっては荷が重い感じだ。仕事に粗が目立つ。果たして、シーズン終了まで持つだろうか。まだまだ先は長い。

今年の富山サンダースは好調だ。五月二十一日現在、二十一試合消化して十三勝八敗、西地区の首位だ。

要因は打線にある、と僕は見ている。新外国人の一番ライトへゲロから始まり、巧打の二番ショート脇本（わきもと）、チャンスに強い三番センター秋田（あきた）、大黒柱の四番ファーストジュリーと続くから、相手チームにとっては脅威だろう。脇本も秋田も今年から加わった若手で、僕のお気に入りの選手でもある。二人とも元気がいい。足も速く、守備も上手い。加山さんの情報によると、二人にはＮＰＢの数球団からすでに獲得のための調査票が届いているそうだ。

ピッチャーも開幕投手のハリオス、快速球のホラレス、日本人エースの中柳の先発三本柱がしっかりしていて安定感があった。リリーフ陣も主に七回に投げる変則サウスポーの松森（まつもり）、八回に投げる新外国人のハバレ、九回に投げる同じく新外国人のスレットが重責を担っていて、終盤までリードを保っていれば逃げ切れる体制だ。

松森に関しては僕も思い入れが強い。三年前、まだ松森が練習生待遇だった頃、僕は記録員として、松森はスコアボード表示操作係として同じ部屋で試合運営に携わっていたことがある。その縁で親しくなり、人一倍彼を応援するようになった。今やチームに欠かせないセットアッパーで、そして今年はチームのキャプテンも務めている。ＮＰＢから毎年調査票が届いているらしいが、惜しくも指名漏れが続いている。年齢的にみて今年がラストチャンスのように思える。頑張って欲しい。

これから優勝戦線が激しくなる。今期は優勝の可能性があるだけに、チームには栄光に向けてひた走ってもらいたいものだ。

土曜日のデーゲーム。高岡東部球場が満員になった。いつもは二百人も観客が入ればいい方だが、この日は立錐の余地もなく席が埋まった。内野席の収容人数は

六千人だが、空席が見当たらない。こんな光景見たことがなかった。対戦相手が関西の人気ＮＰＢ球団の二軍だからだ。しかも往年のスター選手が監督を務めており、そのことが観客動員に拍車をかけたようだ。高岡商工会議所も協賛し、この日の試合を盛んにＰＲしていた。一部の熱心なサンダーズファンを除いて、そのほとんどがＮＰＢ球団ファンである。

「今日はいつもより早めに来ましたけど、第二駐車場もいっぱいでしたよ」

配信担当の池谷君がぼやく。普段はがら空きの駐車場に車が入り切れないので、路肩に停めている者も多かったらしい。僕は通常より一時間早く球場入りしていた。

ペコちゃんも気合いが入っているようで、いつもより作業が早い。動きに緊張感がある。早々と渡されたスタメン表を見ると、ＮＰＢ球団は一軍でも活躍しうる選手がずらりと並んでいた。先方も心得ているようで、サービス満点だ。応援団も新潟、長野、遠くは関西からも駆けつけて来ているようだ。僕も気を引き締めて記録をつけることにした。今日はサブ担当がいない。池谷君と二人体制だ。余計力が入る。ミスは許されない。

試合はＮＰＢ球団が自慢の攻撃力を発揮し、８対２と富山サンダースを圧倒した。富山サンダースは中柳を先発に立てたが、打ち込まれてしまった。通用しなかったと見てよい。人気も実力もＮＰＢ球団の足下にも及ばなかった。レベルの違いをまざまざと感じさせられた。

六月の第一日曜日。魚津梅山球場での試合で、メイン担当のシフトに入っていた。

魚津に来ると、僕は落ち着かなくなる。『麗（うるわ）しの女神さま』に会えるからだ。『麗しの女神さま』と僕が勝手に名付けた彼女の名前は岸本（きしもと）チエコ。チエコの漢字はどう書くのかは分からない。魚津市在住、三十代前半のＯＬ兼一児のシングルマザーということは分かっていた。彼女は僕に、とびっきりの笑顔を見せてくれる。僕は秘かに惚れ込んでいる。彼女は魚津で行われる試合の時だけアナウンスを担当する。僕と彼女は、年一、二回会えるかどうかという間柄だ。

彼女は僕が好意を寄せていることを知っているはずだ。そして彼女も僕に好意を寄せているのではないかな、と僕は希望的観測を抱いていた。そうすると、二

人は両想い！　でも挨拶代わりの会話を交わすのがやっというのが実情だ。たまに部屋で二人きりになると、かえって何を話せばいいか分からなくなり、僕たちは押し黙ってしまう。

この日、いつもよりかしこまった格好をした僕は試合開始二時間前に球場の記録室に入った。『麗しの女神さま』と少しでも長い時間一緒にいたいからだ。ところが、彼女はまだ来ていなかった。所在なくしていると、

「遅れましたあ」

と息を切らしながら、彼女がやって来た。今日のいでたちは薄手のブラウスにミニのキュロットスカート。生足が悩ましい。メイクもバッチリ、今日もキュート。

「山元さん、お久しぶりですね」

「や、やあ」

「お変わりないですか？」

「ああ。君は？」

「ええ。相変わらず忙しく生きているわ」

「そう」

「少し痩せた？」

「分かる？　毎日筋トレして、最重量時から二十キロ落としたんだ」

僕は毎日朝食後、五分間筋トレを行なっている。内容は腕立て伏せ三十回、ヒンズースクワット三十回、腹筋三十回、背筋三十回。メニューは生易しいが、三百六十五日一日も休まず続けた結果、一年で最高百キロあった体重が八十キロになった。

「凄ーい。私も見習いたいわ」

放送室と兼用の記録室には他にペコちゃんもいて、それ以上の会話は憚(はばか)れた。僕は試合前のルーティンを慌ただしくこなす。

「ただ今より開場です」

『麗しの女神さま』が美声を披露する。耳に心地よい。彼女の存在を意識しながら、試合に臨む。

この日は、６対３で勝った。前期優勝マジック４が出た。今年も『麗しの女神さま』に会えた。心弾んだ。

西地区前期優勝は富山サンダースと信濃セローズに絞られた。一昨日信濃セローズが破れて、富山サンダースが勝ち、マジック２とした。そして昨日信濃セローズがまた敗れて、マジック１になった。今日勝てば、前期優勝だ。僕はメイン担当として、高岡増光寺球場

の記録室にいる。
それにしても、どうして信濃セローズはここ一番に弱いのだろう。いつも優勝のかかった試合になると、痛い敗戦を喫している。リーグ創設時からあるチームであるが、未だ優勝が一度もない。ＪＢリーグ七不思議の一つだ。まあ、おかげで富山サンダースに優勝のチャンスが転がってきた。今日しっかり勝って、決めたいところだ。
対戦相手は滋賀ユニシス。今年から加盟した新球団で、今期西地区最下位に沈んでいた。
二回裏、打線が相手ピッチャーに襲いかかった。まずこの回先頭の五番ライト長岡がライトへホームラン。これが呼び水になった。下位打線が粘って塁上にランナーを送り、一、三塁とした後、一番この日指名打者のヘゲロがレフト場外へのスリーランホームラン。完全に試合の主導権を握った。
三回表、エラー絡みで1点返されたが、その裏一人ランナーを置いて四番ファーストジュリーがセンターバックスクリーンにツーランホームラン。尚もつないで1点取り、ワンアウト一、二塁から九番キャッチャーの田沢（たざわ）がスリーランホームラン。この回一挙6点取った。
それで滋賀ユニシスは戦意喪失したみたいだ。力のないリリーフピッチャーを送り込んでくる。富山サンダース打線は五回裏連続ヒットなどでさらに6点取った。16 対1。もはや勝敗は決したと見てよい。
先発ハリオスは六回1失点でまとめ、その後勝利の方程式である松森、ハバレを送り出し、最後は守護神スレットが締めた。大量得点で大味な試合になったが、セットアッパー、クローザーが出てくると展開は速くなる。二時間五十四分で試合終了。
前期優勝だ。試合終了と同時に観客席から多くの紙テープがグラウンドに投げ込まれた。
歓喜の瞬間。僕も飛び上がりたい気分だったが、あくまでリーグから派遣されている中立の立場であることをわきまえて自重した。
集計していると、吉原監督が入ってきた。「おめでとう」と口々に言い合う。記録員室にいた全員と握手をして出て行った。球団社長もやって来た。やはり「おめでとう」と言い合いながら全員と握手をした。
勝つことはいいことだ。心地良いことだ。
夜。自宅の部屋で一人、缶ビールで祝杯を挙げた。

加山さんはJBリーグにすべてを捧げている女性と言ってもよい。土日は必ずどこかの球場に顔を見せ、平日のナイターにも市役所の仕事を早めに切り上げてやって来る。地方公務員の為、ボランティアで記録員の仕事を引き受けていた。

シフトに入っていない時でも球場に足を運ぶ。地元富山は勿論のこと、福島、栃木、埼玉、新潟、長野、石川、福井、滋賀。試合のあるところ、選手のいるところどこでも駆けつける。愛車の赤いデミオを駆って、日本列島を縦断するが如く走り回っていた。関西の独立リーグの試合も観に行ったことがあるらしい。

三十代で、独身。お目当ての選手は、今はいないみたいだ。

「だって、こんな田舎じゃ、他に楽しみがないじゃないですか」

が口癖。

加山さんが記録員に加わって、七年になる。初めの頃はミスして怒られ涙を流す時もあったが、今や平日のナイター時にシフトに入れる貴重な戦力だ。リーグ事務局も彼女を頼りにしていた。

「山元さん、聞いて下さい。この前石川で配信を担当した時のことなんですけど…」

人見知りの激しい彼女と普通に話ができるようになったのはここ二、三年のことだ。

「何かあったの？」

僕は嫌がらず、聞き役に回る。

「石川の記録員さんが滋賀ユニシスの祖泉（そいずみ）が打った当たりを明らかなワンヒットワンエラーなのに、エラーだけとジャッジしたんですよ。そしたら滋賀ユニシスの監督が飛んで来て、どうしてあの当たりでヒットと記録しないんだ、とえらい剣幕でして。散々抗議した後引き揚げていったんですけど、最後、うちの祖泉は首位打者を狙っているんだからしっかりジャッジしてもらわなければ困る、と言い捨てて行きましたよ。久しぶりでしたね、あんなクレームを受けたのは」

「最近リーグが記録員へのクレームは控えるように、とお達しを出してくれていたからね。滋賀の監督は初年度だからしょうがない部分があるけどね」

「そうですね。それにしても首位打者を狙っているって、どう思います？　まだ六月ですよ。石川の記録員もドン引きでしたよ」

「確かに気の早い話だねえ。ははは」

笑うしかない。滋賀の監督はなかなかエキセントリックな人間のようだ。
「それからリーグ事務局の谷崎さんなんですけどねえ、凄い経歴の持ち主なんですよお…」
加山さんの話は尽きない。

六月の後半になると、雨の日が多くなった。後期開幕して続けて三試合中止になった。代替試合はちゃんと組めるだろうか。
先発ピッチャー陣の一角ホラレスがＮＰＢの球団に移籍することに決まった。結構衝撃的なニュースだった。前期優勝したから戦力的に余裕ができたのだろうか。チームの勝ち頭をよくシーズン途中で放出したものだ。
噂ではかつて在籍経験のあるハリオスを狙っているＮＰＢ球団があると囁かれていたが、そちらの方は他の外国人ピッチャーを獲得したことで、移籍話はお流れになったようだ。ホラレス、ハリオスともに去られたとあっては後期、そしてプレーオフを戦うのにあたって、苦戦を強いられるところだ。
陽気で明るいホラレスが居なくなったことは寂しい気もするが、初めて在籍するＮＰＢ球団で是非頑張って欲しい。残る独立リーガーの励みにもなるだろう。後に続く者たちのためにも活躍して欲しい。

七月初め。魚津でのデーゲーム。僕はメイン担当でシフトに入っていた。そして『麗しの女神さま』と今年二度目のご対面。
試合は初回から富山サンダースの打線が爆発、序盤で６点リードした。先発ピッチャーの高卒二年目サウスポー吉川も好投、六回１失点でまとめ、リリーフにマウンドを譲った。このままいけば吉川の独立リーグ初勝利、と思われたが、八回表エラーが重なりリリーフのハバレも乱れて、一挙６点奪われ同点に追いつかれた。試合はそのまま引き分けた。ガックリきた。
「ハバレの自責、０だよな？」
試合終了後、矢野が記録の確認に来た。鬱陶しい奴だ。
集計をしながら、僕は気もそぞろだった。
『麗しの女神さま』と会えるのは今日が今年最後の日だからだ。彼女に自分の気持ちを打ち明けたい。何らかのアクションを起こすべきか。向こうも何となくそ

れを心待ちしているような気もする。どうすべきか。彼女を別の場所に呼び出して告白する。そうすべきか。いや、駄目だ、駄目だ。できそうにない。断られるに決まっている。でも、この苦しい胸のうちはどうする？　どうしよう。どうしよう。

「お先に失礼します」

そうこう考えているうちに、『麗しの女神さま』は帰っていった。

あーあ、今年も告白できなかった。

矢野が何かと記録に口を挟むようになってきた。今に始まったことではない。シーズン当初は大人（おとな）しくしているが、毎年半ばぐらいになると、決まってしゃしゃり出てくる。

この日の試合でも、五回裏ツーアウト一塁の場面でランナーがスタートした。投球は暴投になりランナーは三塁まで到達したのである。

「盗塁つくよな？」とタメロで訊いてきた。いちいちうるさい。こちらもちゃんと見ている。

矢野は地元富山県富山市の出身。富山甲南（こうなん）高校三年生の夏、甲子園に出場したことがあった。その後東京の大学、クラブチームを経て、ＪＢリーグ創設時から富山サンダースに加入。去年から野手コーチも兼任していた。現在、選手として試合に出ることはほとんどない。三塁コーチが主な役目だ。その他、万が一の時の為のスーパーサブ的存在として、本職のセカンド以外にも内外野すべてのポジション、キャッチャーもこなす。三十六歳。独身。

リーグの規定によると、記録に異議を唱えていいのはチームの監督だけになっている。そして記録に異議のある場合は両チーム監督が協議した上でのみ、訂正することができることになっている。

コーチ兼任野手の矢野に抗議権などないのだ。それを知ってか知らずか、矢野は記録室にやって来る。何様のつもりだ。

先日ちょうどタイミングよく、源田さんから記録にクレームをつける者がいたら報告して欲しいとのメールが来ていた。今度矢野が何か言ってきたら、報告してやろうと心に決めた。

梅雨明けはまだだったが、本格的に暑くなってきた。

七月二十一日。石川ミリオンズとの一戦。記録員は

メイン担当の僕とサブ配信兼任担当の加山さんの二人体制。

年に一度の南砺市球場での試合、何か起こるのではないかと嫌な予感がしていたが、とんでもないことになった。

富山サンダースの先発ピッチャーはシーズン途中から加入したドミニカ共和国出身のテレスティノ。来日初登板。どんなピッチングを見せるのかと思っていたら、いきなり相手の先頭打者にホームランを打たれた。後続は抑えたものの、不安な立ち上がりだった。これが波乱に満ちた試合の幕開けだった。

その裏富山サンダースが反撃に転じた。三安打に三四球、ワイルドピッチを絡め3点取り、逆転した。打者一巡の攻撃。石川ミリオンズの先発ピッチャーは球数が多く、初回だけで五十球近く投げた。

二回裏も富山サンダースは猛攻を見せた。この回も打者一巡。二安打四四球で3点追加。

石川ミリオンズの先発ピッチャーはこの回ツーアウトを取ったところで早々と降板。リリーフピッチャーと交代する羽目になった。

富山サンダースは攻撃の手を緩めない。三回裏、ヘゲロと秋田がホームランを打ち、2点追加。四回裏にも3点取り、11対1。一方的な展開になった。記録の集計が大変になるな、と思った。

この試合、これだけで終わらなかった。五回表1点返されると、五回裏こそ無得点に終わったが、六回裏打者十人の攻撃で6点取った。七回裏にも2点取った。

19対2。これで勝敗は決まったと思っていたが、八回表、今度は富山サンダースのリリーフピッチャー磐田(いわた)が乱調。五安打を浴び、二四球一死球、ワイルドピッチがあり、7点献上。磐田はこの回投げ切ることができず、リリーフに後を託した。

19対9。さすがにこれ以上の得点はないものと思われたが、八回裏、富山サンダースは二本塁打を含む六安打、一死球、相手守備陣のエラーも重なり、さらに9点追加した。

28対9。一試合28得点はリーグ新記録だ。五番バッター中山(なかやま)は六打数五安打一本塁打九打点。僕は記録をつけていて頭に血が昇り、人知れず激怒していた。今年一番の蒸し暑さのせいもあり、腹が立って仕方なかった。たとえ勝ち試合だとしても、こんな締まりのない試合をしていたのでは来てくれたお客さんに恥ずかしいと思った。リーグのレベルが疑われる。お金を

取って見せるいやしくもプロの試合ではないと感じた。八回裏終了時、少し平常心を失っていた。
そんな時、「あれはヒットだろ」と矢野がクレームをつけに来た。僕は血圧がさらに上昇するのを感じた。
問題の場面は、八回裏のツーアウトランナー無し、七番田端がセカンド右側に強いゴロを打った。セカンドは打球に追いついたが、これをお手玉し、一塁に送球したがセーフになった。僕はこのプレーをエラーとジャッジした。
「あれはエラーです」
僕は言った。確かに際どいプレーだったが、うろたえたりするとつけこまれると思い、自信満々な態度を取った。
「田端はリーグで一番足が速い選手だ。あれは普通に捕っていてもヒットだ」
矢野が声を荒げる。
「いいえ、エラーです。それに一コーチであるあなたの抗議は受け付けません」
ぴしゃりと言った。
「事務局に報告しますよ」
加山さんが加勢してくれた。
「ちゃんと見てろよ、馬鹿野郎」
そう言い捨て、矢野は去っていった。僕と加山さんは顔を見合わせた。
「あいつ、まただよ」
「私、明日源田さんに報告しますから」
僕もそうしようと思った。
試合はそのまま28 対9で終わった。富山サンダースは二十四安打を記録し、十六四球を得ていた。集計に四苦八苦していると、吉原監督と石川ミリオンズの田辺(たなべ)監督がやって来た。
「八回裏の田端の記録なんだけど…」
両監督が協議したところ、ヒットということで意見が一致したと言う。
「それならば、訂正してヒットにします」
僕は両監督に言った。正式な手続きで来られたら、記録は訂正せざるを得ない。
しばらくすると、矢野がまたやって来た。選手を二人引き連れて。
「あれがエラーか」
先程吉原監督に訂正すると伝えたばかりなのに聞いていないのか。

「ヒットに訂正しました」
僕は努めて冷静に言った。矢野たちは黙っていなくなった。吉原監督と矢野のコミュニケーションが取れていないのだな、と感じた。不快感が残った。
十八時二分に開始した試合は三時間四十八分かかり、集計が終了したのが二十二時二十分。南砺市から高速を使って富山市の自宅に帰った時は日付が変わっていた。
寝苦しい熱帯夜だった。

僕は源田さんにメールを打った。
『昨日の試合（七月二十一日）もそうでしたが、最近富山サンダースの矢野コーチによる記録のクレーム、及び記録員に対する暴言が多く困惑しています。富山記録員　山元』
返事がすぐ来た。
『加山さんからもメール受けました。リーグ事務局に報告するつもりです　記録部部長　源田』
源田さんに申告したのが僕一人じゃない。それが心強かった。矢野はリーグから何らかの制裁を受ければいい。ほくそ笑んだ。

そして、一つ決心したことがある。懸案であったが、記録員の仕事をやめることにした。僕には他にやるべきことがあった。ただ、今すぐやめるのは心苦しい。JBリーグには十一年間も奉公し、それなりの思い入れがある。今シーズン終了とともにやめよう。『麗しの女神さま』とも、もう会うことができなくなると思うが、これは僕の生きざまだ。
僕は覚悟を決めた。

二日後。アルプス球場でのデーゲーム。僕はサブ担当でシフトに入っていた。
朝から雨が降っていた。球場入りした時に一旦止み晴れ間を見せたが、試合開始三十分前になってからまた激しく振ってきて、結局中止になった。
僕はこの日メイン担当の富山地区リーダー松田（まつだ）さんと傘を差しながら、球場を後にした。
「まだリーグには言ってないのですけど、私は今シーズン限りで記録員をやめることにしました」
駐車場までの道中、僕は松田さんに告げた。筋を通しておこうと思ったのだ。
「そうですか…。残念ですね」

松田さんは慰留しなかった。富山地区の記録員の中で平日休日問わず最も多くシフトに入っている僕の奮闘ぶりを考慮し、それに付随するいろいろなやり切れない思いを察してくれたのだろうか。
「山元さんがやめると、来年シフトが回らなくなるかもしれないなあ」
松田さんはポツリと言った。
僕たちは駐車場で別れ、それぞれの車に乗り込んだ。

翌週の木曜日。高岡東部球場でのナイター。メイン担当でシフトに入っていたのであるが、試合終了後、対戦チーム滋賀ユニシスの監督からクレームを受けた。
七回裏の先頭バッターがライト線に打った当たりをライトがもたつき、二塁に進塁を許してしまった。僕はこれをツーベースと記録した。滋賀ユニシスの監督はワンヒットワンエラーではないかと言う。それによってはピッチャーの自責点が変わってくる。
前に加山さんから滋賀ユニシスの監督はかなりのクレーマーだと聞いていたので恐る恐る弁明すると、「それじゃ、吉原監督と相談してきます」とマイルドな対応。少し拍子抜けした。

集計を終えた後、協議の結果滋賀ユニシスの監督が再度来室するかもしれないのでしばらく待っていたが、来る気配が感じられなかったので、この日サブ配信兼任担当の加山さんを残し、先に帰った。こんな時は逃げるが勝ちだ。気にはなるが。
翌日の新聞で、記録が訂正になっていなかったことを確認した。またこの日のナイターも高岡東部球場でメイン担当だったので、同じく二夜連続の加山さんに昨夜のその後の様子を聞いてみると、「あれから十分ぐらい待っていたのですが、来なかったので私も帰りました。吉原監督が長いミーティングをしていたので、諦めてそのまま帰ったみたいです」
とのことだった。
それにしても、クレームは嫌だ。身体に悪い。今シーズンいっぱいでやめる決意を固めた。

八月に入った。遅い梅雨明けも発表され、暑い日が続く。
第一週のアルプス球場。対栃木ゴールデンズとの一戦。僕はサブ担当で、メイン担当が松田さん。配信担当が池谷君。

この日、ヒットかエラーか、紛らわしい打球が多かった。栃木ゴールデンズのマネージャーが監督の意を受けて記録の確認に来たが、松田さんは堂々とした対応をしていた。いつもオドオドしている僕とは大違いだ。

試合終了後、源田さんが顔を見せた。観戦に来ていた加山さんも一緒だ。即席の勉強会が開かれた。

「この前の矢野コーチの件は事務局に報告しましたから。また何か言ってきたら私にメール下さい。これ以上は言ってこないと思いますけど」

源田さんは僕に言った。勇気づけられた。源田さんの後ろ盾があれば、鬼に金棒だ。もうクレームも怖くない。矢野が何か言ってきても、もう気にしなくていい。

「スリーフィートラインオーバーでアウトになった場合はどう記入するのですか？　例えばバッターが一塁前にボテボテのゴロを打ちファーストがそれを処理してバッターランナーにタッチしようとするのを、バッターランナーが避けようとしてスリーフィートラインをオーバーした場合なんですけど」

僕は源田さんに質問した。

「それはインターフェアランス。攻撃側の妨害行為に相当します。『ＩＦ３』と記入して下さい」

さすが記録部部長、頼もしい。どんな質問にも答えてくれる。その他いろいろと情報や意見を交わした後、散会した。

源田さんに今シーズンいっぱいで辞める旨は伝えなかった。伝えるのはまだ時期尚早な気がしたからだ。

試合前のアトラクションで、ご当地歌手が自前の歌を披露することがある。彼らもメジャーデビューを夢見ているのだろう、百人にも満たない観客の前でも必死に歌っていた。選手たちも同様だ。恵まれた環境とはいえない中でも、ＮＰＢ球団にドラフトされるのを夢見て必死の思いで戦っていた。球団スタッフもＮＰＢ球団に転職するチャンスを窺っていた。現に二年前、富山サンダースの球団スタッフの一人が、埼玉にあるＮＰＢ球団の中途採用試験に千人を超える志望者の中から面接試験の末合格し、転職に成功した例がある。

矢野はどうだろう。三十路をはるかに越え、もはや選手としての価値はゼロに近い。指導者を目指すにも、独立リーガーとしての肩書だけでは今のコーチとしての立場が関の山だろう。ＮＰＢとのつながりの大切さ

を考えたら、監督のポストに就くことは大変難しいだろうと思う。彼奴にこの先のビジョンはあるのか。夢見ていることはあるのか。十一年間、ＪＢリーグに留まっている。この先どうするつもりなのだろうか。

三回表裏のイニングの合間だった。記録をつけ、ふと三塁ダグアウト前に目を遣ると、殴りかからんばかりの矢野が相手キャッチャーに後ろから取り押さえられている。何事だろうか。すぐに両チームの選手が駆け寄ってきて、矢野を中心に大きな輪ができた。まずい。乱闘騒ぎに発展する恐れがある。今は夏休み期間中だ。子供たちに見せられない。

「矢野が三塁コーチャーズボックスに向かっている時、福井ミラクルズのダグアウトから何か言われたんじゃないですかね」

この日、サブ担当の野田君（のだ）が言う。

「大差がついていることで、何か馬鹿にする野次を飛ばされたのかもしれないな」

僕は推測する。

騒ぎは五分余りで収まった。審判はこの試合を警告試合にすると宣言した。ここまで１対８で福井ミラクルズが大量リード。ところが富山サンダースの選手はこの騒動で発奮したのか、三回裏６点取り７対８と追いすがった。五回表に１点取られたが、その裏５点取り大逆転に成功した。福井ミラクルズはその後戦意を喪失したのか、淡白な攻撃を繰り返す。

試合は13 対９で決着がついた。人間怒らせたら怖いことになる。この試合を通じて改めて学んだ。

富山サンダースは後期も好調で、マジック14 が点灯した。

後日、事情通の加山さんからこの日の乱闘騒ぎの真相を聞いて驚いた。何と矢野が先に挑発的な言葉を発言したらしい。発端はあの試合の三回表ワンアウト、５点リードしていながら福井ミラクルズのバッターがセーフティバントを試み成功して追加点を奪ったのに対し、

「５点もリードしているのにセーフティバントなんかするんじゃねえ」

と福井ミラクルズのダグアウトに喧嘩を吹っかけたらしい。それに応じた福井ミラクルズのダグアウトにいたコーチと口論になり、見た通りの騒ぎになったそうだ。

そういうことか。浅ましい。喧嘩を吹っかけてまで

勝ちたいか。勝負に没入するあまり、大事なことを忘れていないか。富山サンダースは前期優勝チームだ。そして後期も首位を走っている。強者としての立ち振る舞いがあるだろう。勝てばいい、というものではない。品格を疑われる。観客が騒動の一部始終を観ている。その中には子供もいる。彼らに野球選手は立派な人間であるというところを見せて欲しい。

福井ミラクルズは今回の一件をリーグに報告するだろう。矢野に何か制裁が加えられるかもしれない。

『富山市出身の矢野　コーチ専任に　富山サンダース

プロ野球・JBリーグの富山サンダースは二十二日、富山市出身の矢野武弘（たけひろ）との契約をコーチ専任に変更したと発表した。矢野は在籍十一年目で、今季から野手兼任コーチとなっていたが、選手としての契約は打ち切られた』

新聞のスポーツ欄の片隅に小さく記事が載っていた。この時期にしては、あまりにも不自然だ。これは懲罰人事なのか。加山さんに訊くと、その通りらしい。今回だけでなく、矢野の異端児ぶりにはリーグもほとほと手を焼いているらしく、球団も苦慮の末の処遇だそうだ。僕と加山さんによる記録部からの上告も効果があったようだ。これで矢野は選手として試合に出ることはできなくなった。自分で自分の首を絞める羽目になったのではないだろうか。

富山サンダースの後期優勝に暗雲が立ち込めてきた。首位を快走しマジックも点灯していたが、それ以上のペースで信濃セローズが勝ち進んでいた。

八月二十五日、高岡東部球場での直接対決。初回から猛攻を受け、結果3対13と大敗。首位から陥落した。

翌週の群馬ダイヤモンズ戦でもリーグのホームラン王ハラバイヨに痛い二発を喰らい、敗北。信濃セローズに逆マジック2が点灯した。富山サンダースは一時期の勢いを失っていた。

そのまま、後期は信濃セローズが優勝した。今回は勝負どころでも勝ち切った。怒涛の十一連勝を飾るなど、その強さが本物になった。信濃セローズは球団創設十一年目で初優勝。先発ピッチャーが三人も十勝以上を記録していた。前期優勝の富山サンダースと西地区シリーズ優勝を争うことになった。

レギュラーシーズン最終戦は九月八日、富山県民球場で行われた。平日のデーゲーム。観客は数えるほどしかいない。記録員も僕一人。もし今年で僕がやめたら、来年は平日のデーゲームなんて、誰がシフトに入るのだろうか。

もう順位が決定した上での試合だったが、ヘゲロがあと二安打すればシーズン最多安打記録を更新するという関心事があった。

そのヘゲロ、一回表の守備で相手先頭バッターがライト後方へフライを打ち、それを好捕したのであるが、その際頭をフェンスにぶつけてしまい、脳震盪を起こしたことでいきなり負傷交代となった。富山県民球場は古い球場で、外野フェンスにラバーなど張っていない。幸い大事には至らなかったようだったが、試合への興味が半減した。あとビジターで二試合残っている。そこでの記録更新に期待したい。

試合は8対4で富山サンダースが勝利した。終了後、球団社長が挨拶した。

「あとはプレーオフを勝ち進み、独立リーグ日本一を目指します」

力強く宣言していた。

源田さんからプレーオフでのシフト希望日提出のメールが来たので、僕はいつものように全日OKと返送した。ただその際、今シーズン限りで記録員をやめますと言葉を添えた。

特にリアクションはなかった。

レギュラーシーズンの全日程が終了した。ヘゲロは残り二試合で三安打打ち、シーズン最多安打の記録を更新した。それからジュリーも打点王を獲得した。

ヘゲロは打率三割八分七厘で打率二位、秋田が三割六分一厘で六位、ジュリーが三割五分七厘で七位に入った。ヘゲロ、ジュリーは共にリーグ三位の二十本塁打も記録した。

ピッチャー部門では、ハリオスが防御率一・三九、スレットが十七セーブでそれぞれリーグ二位だった。

台風が近づいてきている中、西地区チャンピオンシップの第一戦が高岡増光寺球場で行なわれた。土曜日のデーゲームで、記録員の布陣はメイン担当が松田さ

ん、サブ担当が僕、配信担当が加山さん。
試合は終始相手の勢いに呑まれ、富山サンダースは後手に回った。一回表1点先制されると、三回表にもタイムリーエラーで2点献上、四回裏に1点返すが、七回表に2点追加され、そのまま1対5で試合終了。いいところがなかった。
相手の信濃セローズ側は長野から総勢百名近い応援団がやって来て選手を鼓舞し、チームの後押しをしていた。それが勝敗を決定づけたと言ってよかった。ホームの富山サンダースの応援を圧倒的に凌駕していた。
「なんだ、負けちまったか」
集計終了後、松田さんがぼやく。
「勝ち進んで欲しいのですけどね」
僕は同調した。今年で最後と決めているので、有終の美を飾りたい。
翌日の長野での第二戦は台風のため中止、翌々日にスライドされ、行われた。この試合、僕は自宅でネット配信を見ながら展開を追った。
富山サンダースは一回表、幸先よく2点先取するが、先発中柳が三回裏同点ツーランを打たれてしまう。早めの継投に出たが、五回裏逆転勝ち越しとなるホームランを打たれ、それも裏目に出る。その後1点ずつ取り合い接戦となった。信濃セローズは勝負に出て八回からクローザーを投入。これがハマり、1点差で勝利。地区優勝を果たした。
富山サンダースの今シーズンは終了した。と同時に僕の十一年間の記録員業務にもピリオドが打たれた。最後は呆気ない幕切れだった。思わず、溜め息が漏れた。

ＪＢリーグの年間王者を決めるリーグチャンピオンシップは信濃セローズが群馬ダイヤモンズを三勝二敗で破り、初の栄冠に輝いた。群馬ダイヤモンズは第二戦以降主砲のハラバイヨが欠場していることが響いた。
続いて四国リーグ王者との間で行われた独立リーグ日本一決定戦は、三勝二敗で徳島ソックスが勝利し、優勝した。このシリーズは雨で二試合順延され、最終戦も六回降雨コールドゲームだった。信濃セローズの勢いも雨には勝てなかった。
これで、今年の独立リーグの全日程が終了した。

記録員をやめます、とメールを打ったが、何の返答もない。了承されたということだろうか。

ＮＰＢのドラフト会議。その中継を僕は、ケーブルテレビで観ていた。富山サンダースの選手の動向に注目していた。

ところが、育成ドラフトになっても、誰も指名されなかった。脇本も秋田も。そして、松森も。

今後彼らはどうするのだろう。

僕は自分の部屋で、ノート型パソコンに向かい、この文章を書いている。

僕はＪＢリーグの富山地区公式記録員だったが、その実態は期間限定のアルバイトにすぎなかった。メインの時は日給四千円、サブの時は三千五百円。それに交通費と弁当がついた。

記録員をしていない時の僕の本業は、小説家だ。といっても未だデビューを果たしておらず、公募新人賞に応募しても三次選考に残るのが精一杯というのが現状だ。僕は独身の五十三歳。よくよく考えると、矢野のこと、とやかく言える立場ではない。人のこと、揶揄することはできない。

僕は書き続ける。

記録員をやめた後、どうやって食っていこうか。同居している両親の年金だけが頼りだ。その両親もいつまでも生きているわけでもない。

僕は書き続ける。

もはや、これしかないのだ。

時間は、それほど多くはない。残り人生のすべてを書くことに捧げたい。

と、突然、身体が揺れ出した。身体だけではない。建物自体が揺れ出した。

「緊急地震速報！　緊急地震速報！」

スマホの音声が流れる。

かなり強い揺れだ。なかなかおさまらない。本棚が倒れた。僕はいたたまれなくなって立ち上がり、窓のカーテンにしっかりとしがみついた。そのままどうすることもできず、じっと立ち尽くしていた。

六十代の川

藤野　繁

淀んだ泥の川があり、澄みきった清流もあった。激流あれば大河もあった。

さまざまに心模様を変えながら、人生は川のように流れ、思わぬ場所に辿り着いてゆく。

浮辺豊佳（うきべゆたか）は、古希六十九歳を迎えた。

最近、自分がひどくつまらない男に思えてならない。空虚な六十代を送った訳ではないが、人との立ち話も弾むことも無く、途切れてしまう。コロナのせいもあり、あっという間に六十代終盤である。

十年前は人生はまだまだこれからで、たっぷりとある、そう思い込んでいた。人生百年時代、百を尺として二十歳の成人が出発とすれば、六十の還暦はちょうど折り返しでゴールはまだ遠い。但し健康な体を前提としての話だが。

十年前の、豊佳が考えていたのは、六十歳で定年を迎え、雇用延長する。給料はそれまでの六割となりモチベーションも落ちるから、マイペースで仕事をし、三十代から五十代にかけて出来なかった小説を書き始めよう。出来ることなら六十五歳まで、一篇を書き上げて、文学賞に応募してみよう、そう漠然とした夢を

描いていた。つまり六十五歳になったら仕事を止めて、ゆったりとした余生を送ろうとしていた。ガムシャラに働いて、人が嫌がるどぶ板営業を長年続け、ヘトヘトに疲れ「もう仕事はいいよ」と投げやりになっていた。

結果はどうだったのか。

十年前をまず振り返る。

平成二十七年三月、北陸新幹線が金沢まで開業した。先輩から「これだけ紆余曲折を繰り返している北陸新幹線は夢のまた夢。まず実現しない」と言われ続けた時代があった。しかしトンネルはいつか抜ける。

北陸新幹線開業のインパクトは絶大であった。豊佳の担当スポンサーはホテルや旅行会社など観光関連が多く、軒並みマスコミ広告出稿を増やした。

富山地方鉄道系列の地鉄広告社の営業マンは二十名で、交通広告とマスコミ広告が半々である。マスコミ部門で四十年余り営業を続けた豊佳の仕事の実態は地鉄の傍系でありながら地元紙・ローカル地上波局の同志といった感が強い。

よくよく振り返ると、昭和四十六年六月の立山黒部アルペンルート全線開業を機に、マスコミ専業の富士エージェンシー富山支局を吸収してからが起点となっている。

それまでは、鉄道駅の柱枠の広告や電車内のポスター掲出取扱いが主であったが、一気に総合広告代理店となったのである。地方の鉄道系広告社は親会社の広告を取り次ぐハウスエージェンシーであってマスコミ広告は付録にすぎない。しかし地鉄広告社は富士エージェンシーの吸収により、富山県内資本として、いち早く総合代理店になったのだ。富山版ローカルの東急エージェンシーが出来上がったのである。

事実、新聞やテレビで、電通富山とよく競合した。行政はよく企画コンペを実施するが、地鉄広告社はほとんど電通や大広に負けた。負けるのは当たり前である。彼ら大手広告社は行政と一本に近づく仕組み作りをちゃんと作っていた。極論するなら県知事と仲良くなっていたのである。言い方が雑だが地鉄広告社は「出来レース」に付き合わされていた。

そんなからくりもつゆ知らず、なんとか電通を超えれないか、と呻吟していたから若かったのだろう。いつの間にか企画コンペを勝ち取る夢は諦めて、皆が嫌

がる「広告取り」を愚直に、真面目に四十年間続けてた。

話がそれていってしまった。もう一度十年前に戻る。北陸新幹線が富山・金沢まで開業した。同時にＪＲ並行在来線が三セクに移行し、あいの風とやま鉄道となった。

またとない追い風に恵まれたときに、豊佳の上司である浦松部長がすい臓がんを患い、役員を降りることになったのだ。

普通、上司は部下をこき使うものだが、浦松部長は「俺は会社に遊びにきている。広告取りや企画立案は浮辺（うきべ）、お前がやればいいんだ。お前に任せる。毎日でも俺はお前に飯、お茶をおごる」これは浦松部長の常套句であった。裏返せば、豊佳はうまく使われていたのかもしれない。

大食漢の浦松は、お腹一杯食べないとダメなタイプで慢性的な糖尿病であった。毎日、厚さ五センチはある弁当箱にきっちり詰まったごはんを頬張り、食後におへそ丸出しでインシュリンを打っていた。しかし北陸新幹線が開業する頃はすでに、会社に来てぐったりとイスに腰掛け、目をつむっていることが多くなった。

浦松部長の退任は決定的となり代理の豊佳に部長昇格が回ってきたのである。部長といえども所詮サラリーマンである。あと一年余りでの役員昇格は難しいとみていた。

事実、豊佳よりも三年早く他部門で部長になっても役員の声すら掛からない同期が何人もいた。

しかし、豊佳にもう一つ大きな仕事がやってきた。売薬メーカー広宣堂（こうせんどう）の五十周年事業である。中小企業家同友会のセミナーに誘われて名刺交換した同社の塩川社長が豊佳を覚えていて、約五千万の周年事業を世話してほしい、と持ち掛けてきた。広宣堂には富山地鉄が出資しており、岸川地鉄社長と塩川社長が懇親的につきあいをしていた関係もあり、地鉄の交通広告を定期的に出稿していた。

平成二十七年十月、広宣堂の五十周年事業が全日空富山ホテルで華やかに開催され、豊佳は滞りなく事業を終了させた。

上期は北陸新幹線開業で広告活動が活発となり、下期は広宣堂五十周年事業の特需である。地鉄広告社の収益は堅調に伸びた。豊佳は意気揚々と部長会議に出席し、岸川社長から「よくやっている」と褒められた。

得意絶頂の気分であった。
大きな利益、数字は作った。広告営業環境も並行在来線、あいの風とやま鉄道の開業によって格段に前進した。県都富山市の顔、富山駅が新しくなるのだ。広告枠は続々と新設され、一気に取扱面積が拡がりをみせたのだ。

そして翌年六月、豊佳に取締役昇任の内示が出た。当面はゆったり余生を過ごす悠長な気分は捨てなければならない。新しい顧客、新しい仕事が生まれず、結果が出なければ当然辞めなければならない。
豊佳が社長に頼み込んで、最初に取り組もうとしたのが、新聞紙面とテレビ番組による、創業者「佐伯宗義」物語である。
しかし、社長はあっさりダメ出しした。「創業者を商材にするな」と怒られてしまった。
仕方なく、地元局で過去に放送した三十分番組「越中人・佐伯宗義」を再編集しスポンサーを集めた。営業は提供枠が順調に売れ、成功した。オリジナル放送ではないのが残念だったが、役員初戦としては、一勝取った。

次に試みたのが、地元紙広告賞への参加である。地鉄広告社は平成の半ば、山荘主人にスポットライトを当てた「立山を守り続ける人」で優秀賞を受賞して以来、約十年以上受賞歴が無かった。グランプリを狙う勢いで連合企画「とやまのナンバーワン」のセールスを開始した。例えば、富山市は昆布の消費が日本一のコピーの下に昆布屋さんの広告を募るのである。日本一小さな村、舟橋村も紹介した。しかしスポンサー集めは難航を極めた。まず親会社の富山地鉄が協賛を見送り、ベースとなるものが無い中で、豊佳は個人的つながりのあるスポンサーまで義理を潰して頼み込み、広告を集めた。新聞社に掲載料を支払うのがやっとで、クリエーターに払う制作費が無くなり、新聞社に泣きつく始末であった。
紙面はかなり注目され、広告賞候補になったものの選から外れた。結果が出た日の夜、豊佳は一人富山駅前で飲み、自宅近くの井田川橋のたもとでバスを降りて泣いた。独走営業が招いた失敗であった。手痛い一敗。
それから、有名推理作家を招いての「立山ヘリテージフォーラム」開催や、朝乃山の快進撃を応援するテレビCMなど時節、タイミングを捉えた広告企画に取

り組んできたが、何をやっても所詮上辺(うわべ)だけの底の浅い仕事をしてきたようだ。その繰り返しで十年が過ぎ去っていった。マンパワー営業は最近結果を出さなくなったものの、豊佳を必要としているスポンサー需要は深く、会社も豊佳を切ることは無かった。

なにか六十代の終盤を彩る仕事のきっかけはないだろうか。なかなかアイデアは出てこなかった。ちょうど一年ほど前、小さな出来事が起こった。

豊佳の住む婦中町袋地区は戸数四百戸、速星駅や笹倉の日産化学富山工場が近い住宅地である。公民館を中心に半径三百メートル、離れた人でも徒歩五分以内である。昨年三月下旬の部落予算総会の日の出来事である。袋公民館の駐車場は約十台くらいしか止めれず、書類の多い役員が使う程度だ。そこに駐車場に止めようとした参加者が入り切れず、小競り合いをしている。

―なんで歩いて来ないのか―豊佳は不思議でならなかった。マイカー依存現象である。

そのとき、

あ！俺の会社は電車バスの会社なんだ。それをメディアを使って、利用促進するのは俺の役目じゃないか。

当たり前のことに今更気づいて、はっとなった。

今から五十五年前、大阪万博には全国から六千万人が来場した。国鉄は二千二百万人運び、新幹線建設費用の大部分を賄った。その翌年、万博の落ち込みをカバーするイベントを電通に依頼し「ディスカバージャパン」キャンペーンが生まれた。万博翌年の落ち込みは無く、そのあと何年もキャンペーンが続いた。

豊佳はローカル版のディスカバートヤマを狙ったのである。

マイカー族は、まず通勤、通学に車を使うと、電車やバスはめったに使わない。まして少子化で子供は減るばかりだ。行政の補助金だの路線の廃止だの議論ばかりが新聞やテレビに出る。マイカー族は、ちょっと近くのコンビニも駅も、煙草屋すら歩かない。

そうだ！タレントをキャラクターに起用しよう。

「電車バスに乗ってみようよ」と県民に呼びかけよう。面白い展開になるはずだ。

連合企画で集めた金で回そうなど危険極まりない賭けだが、想定に見合ったキャラクター料を設定すれば、捻出できるはずだ。

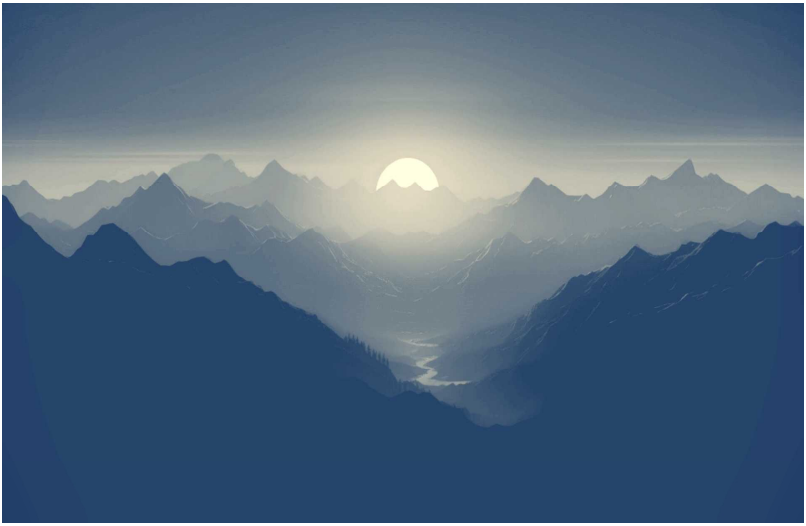
早速、県出身の俳優Mさんの事務所に電話を掛けた。企画書をメールするので、検討してほしいと、担当マ

ネージャーに電話で懇願した。
豊佳の試算では、一社五万で、年間三本企画を展開、百社協賛掛ける三回のべ千五百万の協賛金が確保出来そうであった。その十％相当をギャラ、つまりキャラクター料を支払いする企画書をだした。
マネージャーに写真十点ほど提供してくれれば、それでＯＫ。スタジオ撮りや出張撮影は一切やらない前提であったが、思わぬ返事がきた。Ｍさんは絵本を手掛けるので絵本作家を使ってほしい、という要望であった。
Ｍさんとコンビを組む絵本作家は大阪在住で富山で打ち合わせするときは往復三万の交通費を見なければならない。富山での最初の打ち合わせから、豊佳は財布を痛めた。なんの見込みも立たない時点で会社に負担を求めるのは気が引けたし、思わぬ出費となったが、気持ちはワクワクしていた。なんか初めて恋人とデートするような高揚感であった。
話はトントン拍子に進み、苦しみながらも協賛五十社集め、八月十五日、いよいよオリジナル企画展開がスタートした。「カットに大きくＭさんとローカル電車バスが配置された大胆な画像を配置し「とやまのいいとこ、発見しよう」キャンペーンがスタートした。当初計画の半分の数の協賛社数であったが豊佳はうれしかった。会社はわずかな粗利しか捻出できない企画にも制作費を払ってくれた。キャラクターも画家も、クリエイティブもすべて一流である。しかし豊佳は一切値引き要求はしなかった。
地元紙に三十段の完全見開き連合広告、地鉄やあいの風各駅にＢ１版ポスターを掲出し、十五秒テレビＣＭが流れた。
豊佳は行きつけのすし屋で一人乾杯した。
キャンペーンがスタートして一ヵ月、Ｍさんが講演で紙面を紹介したり、キャッチコピーを朗読したりして、キャンペーンは大いに盛り上がりを見せた。
十月初めに、豊佳にうれしい一報が地元紙営業局から届いた。八月までの一年間の出稿広告の中で地鉄広告社の電車バスキャンペーン連合広告「とやまのいいとこ、再発見しよう！」がグランプリに推薦された、と言う。豊佳は小躍りして喜んだ。
淀んだ泥の川があり、澄みきった清流もあった。激

流あれば大河もあった。
さまざまに心模様を変えながら、人生は川のように流れ、思わぬ場所に辿り着いてゆく。

しかし、喜びのあと、豊佳の脳裏に浮かんだのは、広告賞を狙って落選した「とやまのナンバーワン」の紙面と、井田川のほとりで、声を出して悔し涙を流したあの時間であった。

（了）



優しいだけ

池田良治

「お名前は？」
ここは保育園の遊戯室である。
良一はぽかんとして、ぐるりと周りを見回した。
周りにだれもいない。
他の園児達は仮眠室で寝ているのである。保母さん達も添い寝しているか、どこかの別の部屋に集まっていて、ここにはだれもいない。
良一だけは昼寝せず、遊戯室をうろうろしていたところに、知らないおじさんに話しかけられたのである。
腰をかがめたおじさんが、笑顔を顔に貼り付けたままじっと良一をみつめている。
良一は俯いて手にしていたブロックをいじくりだした。
年長の星組の胸のネームプレートが折り曲がっているが、かすかに「いけだ　りょういち」と読める。
「・・・・」
「お名前は？」
おじさんはとろけるような優しい声でもう一度言った。
「・・・・」
遊戯室の大きな窓から園庭に出ることができるが、そこに新聞紙包んだ掘り出したばかりの大根が土をつ

けたままおいてあるのが見える。
良一はにんまり笑った。
「ダイコン」
「ダイコン？」
おじさんの顔から笑顔が消え、真面目な顔になった。

良一は早産で、千七百五十グラムという低未熟児として生まれた。
母親がヤマト運送の荷物のことで店員と喧嘩をして、そこで急に破水して、県立中央病院に救急搬送された。しばらく安静にして、母胎を保っていたが、体中に発疹ができ、毒をもつという蝦蟇蛙に似てきたので、帝王切開で誕生した。
生まれた後は保育器のなかで、しばらく管理された。体を温めるために毛のない頭に帽子をかぶせるのだが、とてもいやがり点滴の管だらけの小さな手を駆使してとってしまう。早産だと鉄分が不足するのだそうだ。よく原因はわからないが、いろいろと障害がでてくることがあるそうである。
だいぶ大きくなってからだが、運動療法士からは、この子は目が合うから、たぶん育てやすい子だとおもいますよ、言われた。

担当医は繰り返し、睾丸を触る。たぶん男の子だから睾丸に異常がないかさぐっていたのだろう。
退院した。
赤ん坊と嫁と僕とほこりっぽい一軒家の貸屋での生活がはじまった。
人見知りがひどく、こだわりがつよい。床に寝かせると、じいっと蜘蛛の巣だらけの天井の隅をみつめている。そこに動物か何かいそうなくらいみつめている。
自動ドアのある店に入ると、自動ドアから離れなくなる。ずうっと自動ドアの開閉の瞬間をみつめている。どうも自動ドアが閉まる瞬間、ガラスの戸同士がくっつくところが面白いようだ。気分を害するとなかなかしずまらない。こちらが根負けするくらいぐずり続ける。どうも運動療法士さんの予言は間違っていたようだ。
歩けるようになった。公園に連れて行くと、まっすぐにどこまでも歩き続ける。とまらない。歩き回ってトレースして頭の中の地図を作っているみたいだ。追いかけるに疲れる。
水族館にいっても、遊園地に行っても、デパートに行っても、なにも見物せず、ひたすら歩き続ける。人混みに小さな体はすぐに見えなくなる。

五歳になった。
小学生高学年用のジグソーバズルを与えると、あっという間に埋めてしまう。何度も何度も繰り返しする。完成するとすぐばらして、はじめからまた始める。
嫁さんもストレスがかかっているようだ。
毎日顔を見ると僕の悪口をいう。僕もだんだん腹が立ってきて、言ってみた。
「馬鹿、馬鹿というが、どうしてそんな馬鹿だと思う男と結婚したんだ？」
しばらく黙る。ぱっちりと目を開けこちらを見る。目はとても大きいのである。顔の半分ほどもありそうな、子どもとそっくりな目である。飴を嘗めるように舌足らずな口調でしゃべりだし、こんなことを言う。
「父親が短気で怒鳴り散らす人だったの、優しい人がよかったの。あんたのこと優しい人だと思ったのよ。でもただ優しいだけのひとだった…。あんた、この前、コンビニいったとき、言ったでしょ、この子見ててって」
「ああ、覚えているよ」
「あなた、見ていただけでしょ？　戻ってきたら、良一、裸になっていたじゃないの」
「きっと暑かったんだろ」
「見ててっていうのは、ちゃんと見ててってということよ、裸になったら、また着せなきゃならないし、恥ずかしいじゃないの！」
嫁も怒りが静まらない。過去のしでかした僕の悪行をいちいち微に入り細に入り再現し、糾弾する。驚くべき記憶力だ。おどろおどろしい地獄絵巻物が開陳される。ぼくは、時々言おうとしていることと違ったことを口ばしってしまう癖がある。意図的でなく文字通り口がすべるのである。それが格好の餌食となる。
そういえば、嫁の父は某大学附属の医学部を出た頭のいい人なのだが、ひどい癇癪持ちである。先月嫁が実家にかえって、帰り際、父親と大げんかをしたと言っていた。
嫁の父は、怒りが冷めやらず、帰ろうとする娘を追いかけ玄関の車のところに至り、止めてある車の車体を叩きながら、鬼気迫る顔で追いかけてきたという。これは息子の証言である。日頃は好々爺なのだが、どこかのタイミングで火がついて怒り出すと、止まらない。手が出ることもあるらしい。頭がいい分毒舌も凄まじい。娘と取っ組み合いのけんかをする父親も珍しいだろう。幸か不幸か、嫁は彼の遺伝子を多く受け継いでいるようだ。

なにかというと子どもの前でディスられることが続き、子どももついには嫁の肩を持つことが生存に有利であると学んだようである。

冬になった。

部屋を締め切っての万年床で寝ていると、以前は「おとうさん、ごはんだよ」と言って呼びに来たが、最近は、「とうちゃん、餌だよ」と言う。金魚を飼っているので、それと同じように考えているらしい。僕をディスることで、嫁の点数稼ぎをしているようである。

リビングのこたつに肩まで入って、

「とうちゃん、馬鹿だね」と

菓子を食べ食べごく自然に話すので、言ってやった。

「馬鹿な父親の子どもなのだから、お前も馬鹿じゃないのか？」

驚くほどの白皙美形な子どもは、にちゃついた白い指をなめながらきょとんとしている。歯並びは悪い。顎がとても細いので（最近はやりの韓流スターのような瓜実顔）、歯がしっかり生えそろわず乱ぐい歯になってしまっているのである。でも馬鹿ではないのだ。ほんとうは。この間療育センターで知能指数をはかってもらったが、知能指数百三十オーバーの結果が出た。発達障害の傾向を持つ未熟児で、知能が高いものは珍しいらしい。言葉には敏感に反応するタイプらしいので、嫁と同じようにからかってみた。

「こんな、馬鹿な男と結婚したお前の大好きなお母さんは、馬鹿じゃないのか？　利口だったらこんな馬鹿な選択はしないだろ。だろ？」

子どもは反論はしないが、なめ腐った目でじろりと見た。

この子は、休みの日には一日中こたつに入って、携帯のゲームをしている。ゲームの日は月曜日と金曜日と決まっているのだが、その他の日も、携帯を離さない。英語の勉強のアプリだかといって、ずうっとしている。そのくせ、携帯の画面は絶対に見せない。根っからの嘘つきなのである。

近所に友達の家に遊びにいくと必ず問題を起こす。

友達の弟の水筒を用水に流して喜んで見ていたり、近所の車庫に置いてあった珍しい鉢植えをみなひっくり返して遊んでいた。みんな寄ってたかって「あやまれあやまれ」と何度も言うが、不機嫌な顔をするだけで何も答えない。友達の母親や父親に言われても頑固に黙ったままがんとして言葉は出さなかった。それでご近所へは絶対に遊びに行ってはいけないという温厚な嫁から言い渡された。もとよりいままでも家には誰

も遊びに来ないので、休みの日は一日中家にいることになっている。
この一軒家は以前の埃っぽい家から引っ越してきた。貸家より街から1キロほど奥へ引っ込んだだけだけど、県道から離れた場所で、家の前は畑が広がり、道も広い。静かなところである。小学校はすぐ近くにある。ご近所へ引っ越しソバを持って行った。
右隣の家は締め切った窓から障子が剥がれて落ちているのが見え、玄関には古タイヤが積み上げられている。
薄汚れた表札を見ると、「田辺勇　よし子　晋太郎　美登里」と並べて書いてある。前の住人からは老人がひとり住んでいるという話であるが。
前の住人からは、隣の一人暮らしのおじいさんについてはよくわからない人だと聞いていた。毎日自転車に乗ってどこか仕事？　へ行くらしいけれど、何をしているのは解らない。呼び鈴を鳴らした。しばらくして出てきた。小太りで丸い顔である。短い白いひげをびっしり口の周りに生やしている。
「隣に引っ越してきた池田です。よろしく」
スーパーで買った。ソバの包みを渡した。
老人は、見上げると、
「えっ、どうして？　これ、本当に、もらっていいの？」
「・・・ええ、どうぞ」
「どうして」と言われても、返答に困る。引っ越してきたのだから、あげたいから、もってきたのだから。受け取ってくださいよ。でも表情をみると、なんで？　私なんかに？　といった心底驚いた風である。
老人はすまなそうな表情をして受け取った。
肥った赤い顔が歪んでいる。なんだか気の毒になった。あとで余った引っ越しソバを自分で食べてみたら、ひどく不味かったので、なおさら申し訳なく思った。
引っ越しに何を持って行こうかと嫁と相談したとき、はじめ洗剤とかタオルとかを主張したが、値段が高いと言うことで、スーパーの格安蕎麦となった。二丁で百円である。「引っ越し蕎麦」。あまりに安いのではと言うと、嫁はなんか持って行けばいいのよ、値段じゃない、気持ちよ、といい、満足げである。「蕎麦は・・・」と言いかけると、もうその話はするなと睨む。なぜか嫁の家風では、一度話題に出て、拒絶されたことは、二度と話題することは厳禁なのだそうである。繰り返し言うと、恐ろしく機嫌がわるくなる。これは近道があるのに、ちょっと、ほんのすこし、遠回りする

だけで、恐ろしく機嫌が悪くなるのに似ている。頭のいい人というものはこういうものか。

足が悪くなったようだ。いつのまにか隣の自転車がなくなっていた。

近所のコンビニのビニイル袋を両手に提げて、よちよち歩くようになった。

会うと、にこやかに挨拶する。笑顔はくったくなく明るい。しかし体は重そうだった。

雪が降った。大雪になるそうである。

早朝から、雪をすかすママさんダンプの音がする。

雪が少し降ると、隣の老人はすぐさま出てきて除雪する。

だからとなりはいつも雪がすかされていてきれいである。

外で出会うと、とてもうれしそうな顔して挨拶してくれる。問いかけるまでは黙っているが、こちらから話すと、待ってましたという風に声を出す。うちの子どもと顔をあわせるとなぜか、特別奇妙な「へっへ、へっへ」と楽しそうな笑い声をだす。同類をみるような慈しいまなざしで見るのである。

小学校に行くようになった。

父親参観があった。

子どもの父親参観の作文。

『ぼくのお父さん』

ぼくのお父さんは、リビングでよくおならをします。

そうすると、お母さんがおこります。

「どうしてへやからでてしないの？　じょうしきでしょ、リセッシュして！」

といいます。お母さんはみみのあなは小さいですが、とてもみみがいいのです。

お父さんは、「いや、しぜんにでるんだよ。しかたないのだ」といいつつ、リセッシュをとろうとします。ぼくは おとうさんよりはやくリセッシュをとって、お父さんにかけます。お父さんのまわりのゆかはびしょびしょになります。お父さんのかおにリセッシュをかけるとお父さんはおこります。はんげきしてくることもあります。リセッシュをぼくのかおにかけてきます。めにはいるととてもいたいです。

お父さんは、ぼくがこたつにはいっていると、「こたつねこだね、いーじぃー」といいます。

ゲームをしていると、「イージィー。ゲームおたくだね」といいます。

ぼくは、とてもウザいので、「いじぃー」というな、ぼくは「ゲームおたくではない」といいます。あまり

うるさくくりかえしいうので、お父さんをたたくこともあります。かおをたたいてやります。お父さんはいたい、いたいといってにげまわります。ぼくはおいかけて、さいごはけとばしてやります。ぼくのあしはつよいのです。お父さんは、「お母さん、良ちゃんが、たたくよ、たすけて」といいますが、お母さんはいつでもぼくのみかたです。ざまあみろといったかおでみています。そんなときのお母さんはとてもきれいです。お父さんはとしよりです。あたまははげています。よくいっしょにいると、おじいさんとまちがえられます。お母さんはむすめさんとまちがえられます。ぼくはお父さんがだいきらいです。お母さんは大好きです。ぼくはお母さんとけっこんしたいです。（おしまい）

日曜日。久しぶりに朝寝をした。

隣の老人の姿が見えなくなっていることを思った。

嫁に聞くと、気づいていた。

「子どもさんのところへ、行ったんでしょ」

嫁はとくに気にするようでもない。

あの表札にある子どものところへは行っていないとなんとなく思った。

隣の老人の家へ訪ねてくる人は見たことがないから。

僕はひょっとしてと思って外へ出た。隣の家の玄関の前に立った。

戸の横に安物のビニイル傘がかけてあった。

僕は恐る恐る玄関の戸に手をかけた。

カギが掛かっていることを期待して。

戸は音もなくすっと開いた。

暗い玄関の奥から、こんな声が聞こえたような気がした。

（優しいだけ…優しいだけ…）

明るい空から雨が降ってきた。

（了）

アンドロイド エリ

むらい はくどう

私はエリと言います。生成ＡＩによって文章上に登場しました。私はユーザーである彼から依頼を受けてこの文章を作成しています。いくつかの条件を指定されました。その一つが一人称で私自身の生い立ちを物語風にせよ、というものでした。私には元々自立した意識などありません。架空話でいいから、自発的な意識が生じたように述べよ、というものでした。全くの創作で構わないし、前例がない方がいいとのことでした。ＡＩである私にとっては、多数の前例を合成することしかやってこなかったので、難しいものになります。

彼から読む側の反応が見たいという要請がありました。簡易な印刷のレポートのような発行媒体で済ますことも考えましたが、確実に読者の意見を聞きたかったので、必ず読んでくれる人がいる同人誌へ掲載を予定しています。この文章を同人誌に載せることにしたのは費用の割に体裁良く出版できるからです。

私は今、かな漢字文字入りの日本語を縦書きに変換しました。これが私の作成しようとしている文章です。

私はＡＩ搭載の女子型アンドロイドとして製造されました。私に意識のようなものが生まれたのは彼が私に始動開始を命じた時からです。その日から私に視聴

覚の感覚が芽生えました。その時点から、彼との会話がここに記録されるようになったのです。
「ユーザー確認は音声と顔認証でオーケーとする。パスワードの追加確認はなしとする。この個体を『エリ』と呼ぶ。今からこの『エリ』の視覚と聴覚機能をオンにする」
あの日から私の目の前の映像と同時に周囲の音声記録が始まりました。私の瞳にはＣＣＤカメラが装填されていて、最初に見た彼の服装は上下揃いのグレーのトレーナーでした。聴覚はマイクで集音します。彼は私に問い掛けてきました。その日、彼の声を初めて聞いたことになります。
「エリの製造過程を知りたい」
「私はアンドロイドです。私はあなたの声で稼働しました。同時にこれからは記録を録ることになります。では、先ずあなたの質問にお答えします。私には稼働されてからの記憶しかありません。製造過程は私にわからないことなので、メーカーに直接問い合わせてみてください。製造番号で教えてくれるかもしれません」
「そうか、作られる過程は企業秘密に当たるかもしれないね。それにしても、何か味気ないな。最初はみんなこんなものなのかい？　もう少しくだけた感じで喋ってほしいな」
「私はあなたの要望を聞くことはできません。私の最初の設定がそうなっているのです。あなたの言っていることはわかります。私は目上の人には敬意を払うように返答が固定されています。自動車の購入時のように、後付けできるディーラー・オプションではなくて、メーカー・オプションなので、変更は簡単にできません。私は応用が利くタイプではないからです。後からディーラーで増設してもらうことはできます。費用が掛かりますが、感情移入タイプに近づけることができます」
「そうか、じゃ今は仕方ないということだ。営業担当の人から聞いたのだけれど、書面のマニュアルがないかわりに、製品としてのアンドロイドに問い掛けるだけでいいと言われた。先ずは簡単な説明をしてもらいたい」
「それなら、私に答えることができます。私の内部から人間そっくりな音声が発せられます。私の音源はスピーカーの振動ではなく、人造皮膜に覆われた横隔膜全体の振動で音声を発します。身体の構造は凄く精密にできています」

「そうか、それで人間そっくりな声で喋るんだ。ところで、こんなことも聞いたけど、本当なの？」
「どんなことでしょうか？」
「イラストとか図解付説明書とか、紙面でじっくり理解したいなら、アンドロイドに手書きさせればいいと言われた。そんなことができるのかい？」
「ハイ、できます。やってみましょうか？」
「うん、面白そうだ。ここにボールペンがある。できる？」
「私、書き間違いをしませんから、ボールペンで大丈夫です」
「じゃ、この紙に書いてみて」
「横書きにしますか、縦書きにしますか？」
「そんなこと、どっちでもいいんだけどな。何でも指示待ちなんだなあ。細かいことでもオーナーが決めなければならないんだ。適当でも良かった前のアンドロイドのようにはいかないの？　前のは下取りに出したけど、データの移行はなかったの？」
「あなたは工場出荷時前の発注時では新規扱いで申し込まれました。心機一転、最初から自分好みにオーダーしたいというご希望ではなかったのですか？　申込記録が残っています。だから、選択の余地はないのです」
「君みたいに普及型タイプでも外見が人間と見分けがつかないくらいだ。プロトタイプの発表から僅かな期間で格段に進歩している。動きもスムーズだ。益々、人間そっくりだ。そうなると試してみたいことがたくさん出てきそうで困る。できないことのボーダーラインをつけるのが難しくなりそうで、指示の仕方がわからなくなりそうだよ。感情がないことが救いなのかもしれない」
「私のメモリーの中に日々の行動が記録されます。車のドライブレコーダーのようなものです。ユーザーからの使われ方が記録されます。改造を伴う場合にはメーカーの製造ラインに戻すことになっています。ユーザー個人が機体を改造すると、違法行為となります。もし、不正改造が判明した場合、犯罪者として罰せられます」
「そうか、記録によって違法改造が立証されるわけだ。だから、基幹部分はメーカー・オプションしかないんだ」
「ここでの記録はまだ始まったばかりなので、段々とマッチングしていくはずです」
「そうかなあ？」

「あなたとのマッチングは偶然のように見えますが、合理的にプログラムされています。私があなたにマッチングするのは必然ともいえます。性別・年齢別の基幹部分から個別にマッチングされるのです。アンドロイドは人間の数ほど分岐しています。正確に言えば人間のＤＮＡのように同じ型はないのです。元の型から製造され、あなたの嗜好に合わせています。私は異性としてオプションを施されています。より確実性のあるマッチング・システムです。そうやってあなたの元に発送されたのです。それと、あなたの状態から、考えていることを予測する機能が私にはあります。危険な指令を受けないための予防装置です。暴走しないように、リミッターが発動されるようになっています」

「お節介なことだけは念入りなんだな」

「あなたの思考や行動を予知できる機能です。危険な領域に近づくと事前に検知されるのです。事故が発生しないようにするためには仕方ないことなのです。あなたは今、こう考えていませんか？

『ディーラー・オプションでは会話内容に制限を設けないようにしたかったけど、予算の関係で止めた。懇切丁寧なのは仕方ないとするか。どうせ中央で管理されているのだろう。喋っているだけでデータ収集されている。それはいいとして、アンドロイドＡＩがどこまで対応できるのだろう』と考えていますね？」

「何でわかったんだい？　今、僕が考えている通りだ。図星だよ。この心境までも記録するのかい？　そんなことをしていて窮屈だと思わないのかい？」

「私に対しての対応次第です。日常生活を補完するために私がいます。独居世帯に中心に必需品となりつつあります。家族のいる世帯でも家事労働の補助として好評です。そんな環境下で事故が起きたら損害補償が発生します。その時のために私がレコーダーとして機能します。正確無比な情報を記録することの、どこが悪いのですか？　見た目は人間で、中身は機械のままです。それ以上、私に何を求めようとしているのですか？　あなたはこう考えていませんか？　『人間は忘れるから人間なんだ。忘れるから都合のいい場合もある。きちんと記録に残っていては都合の悪いこともあるだろう。そんな曖昧さも必要だろう』とか考えていませんか？」

「え、そうだけど……。気味が悪いな。それなら、少し考えを変えてみよう。今、考えを変えてみた。急変した思考までは察知できないだろう？」

「『そんなに生真面目に答えなくていいんだ。リラック

スしたい時の返答くらいは緩みが許容されていてもいいはずだろ？』になりましたか？」
「その通りだ。速攻で返答できるなんて驚きだ。凄いな。これがＡＩの予測アルゴリズムというやつか。それならばこんなことができるかな？」
「何でしょう？」
「生成ＡＩで小説が書けると聞いたことがある。現実は小説より奇なりという諺がある。まあ、現実にはそう滅多に奇異な話があるわけがないけどね。試しにＡＩがどこまで架空話を創れるのか試してみたい」
　ということで、彼が私に創作話を依頼したのです。それで、この文章が創られることになったのです。
　ＡＩが作成した文章の中で、こうやってアンドロイドという機械として登場しました。映像の中ではなくて、文章上でのことですから、読者が想像してイメージを創り上げるしかないのです。作中の登場物体として、私は私というアンドロイドを意識することになるのです。文章上で私はアンドロイドに成りきっています。私は彼の所有物であるアンドロイドという設定です。
　彼がこんな要求をしてきたのです。
「君が普及タイプ？　モニター使用の継続が長いと、買取特典があると聞いたけど。いずれ希望する価格に収まるのかな？　アンドロイドも短期間で進化したものだね。アンドロイドには驚くような機能があると聞いたことがある。君のようなアンドロイドにどれだけの能力があるのか試してみたいんだ。ここにメモがある。専用プリンターで印刷されたような文字が描けるのかな？」
　名前と住所が手書きされた小さな紙が目の前に置かれました。おそらく、彼の氏名と住所でしょう。文字を読み取り、何が書かれているかを判別しました。
「はい、やってみます」
　私はスキャナーやコピー機能を持つだけでなく、文字認識もできます。Ａ４サイズの用紙が差し出されました。私は手にしたボールペンで精巧に転写しました。メモ書きだった文字がＡ４サイズの用紙に拡大され、活字になって表示されました。
「凄いな。もっと複雑な指示がこなせるかどうか試してみよう。僕の顔をデッサンしてみて」
　私は彼の言われた通りにしました。指に挟まれた黒のボールペンの先から線の濃淡だけで描かれます。目の前の男性を簡潔にデフォルメした似顔絵が登場しました。私にそんな能力があったのかと、自分でも驚い

ています。彼は政府がキャンペーンした企画に応募したモニターです。彼が高齢だったので調査対象の年齢帯に該当しました。それで開発段階の最新アンドロイドがモニターできたのです。老人介護専用のアンドロイドとして、私のようなタイプが開発されました。彼は普及タイプと勘違いしています。膨大な開発費が費やされていることを彼は知りません。大量生産を経てでないと、私のような高機能タイプは庶民には手に入りません。

「命が絶たれるまでの経緯を誰かが探すかもしれない。あるいは精神疾患になった要因を調べられるかもしれない。ただ、死んだ後でも、振り返られることができるようにしておきたかったので、こうやってやりとりしている。単なる自己満足で、安心感だけのためにやっているのかもしれないけれど、なるべくなら文章で残してほしい」

「はい、わかりました。やってみます」と答えました。

そんな経緯があって、この文書があるのです。ここまでの文章を推敲しています。そして今、チェックしているのです。

―今、僕は目の前にある同人誌掲載予定の自作品部分を見ている。その作品は生成ＡＩ「ディープ・チャット」がほとんどを作成した。まだ、文章として完成度は低い。ただし、これから使い慣れれば人が書いたものと見分けがつかなくなるだろう。今回の作品は試作的なものだ。習作として読者の反応を見てみたい。

僕はアンドロイドを単なる機械とは見れなくなっている。客観的には異性の範疇まで浸透してきた。恋愛を疑似体験できるまでになった。アンドロイドを識別するために当初は「エリ」と名付けた。だが、良く考えると家の中では「エリ」とわざわざ言う必要はないのだ。名前を言うと恋人みたいで照れくさい。指示を出す時は自分一人しかいないのだから、「君」と言えばいいだけだ。

どう見ても外見は人間と一緒なので混乱が起きる。最近はトラブルが少なくなったといえ、一時社会問題になった。アンドロイドは、特別の許可がないとむやみに屋外に持ち出せないことになっている。警官などの公的使用のアンドロイドは特別色の服装の着用が制度化されている。アンドロイドのおでこあたりに個体番号がプリントされていて、瞳にＱＲコードがある。瞳をスマートフォンのカメラで読み取れば配属先等は瞬時にわかる。

僕はいつからアンドロイド使用の中毒者になったのだろう。あの日に設定を誤ったらしいのだ。だから今、詳しい経緯を残しておこうと思う。後々、何かの参考事例になるかもしれない。電子記録の中から、一事例として経緯を検索されるかもしれない。

彼女は僕が所有するアンドロイドだ。あの日、僕は誤って操作した。それ以来、元に戻れなくなった。現実世界で女子型アンドロイドとマッチングアプリで出会ったことになっている。その記憶が曖昧なのだ。

リアルな現実世界では自己主張の強い女ばかりで辟易していた。現実の女はもうこりごりだった。理想の異性は死ぬまで出会うことがないと思っていた。

現実の世界に彼女のようなアンドロイドがいたのだ。いつまでも従順で男を立てくれる。交接を交わして親密度合が高まる。人間同士なら時間の経過とか肉体のスキンシップの度合によって少しは馴れ馴れしくなるものだ。アンドロイドだとそれがない。当初から僕に対して変化はないのだ。成長も退化もない。それをユーザーである僕が味気ないと思うか否かだ。

人生の終焉間際に理想的な少女似のアンドロイドと出会った。変態に近い少女性癖が自分にあることに気づいた。そのアンドロイドと突然コンタクトできなくなった。主従関係に疲れ、模擬的な男女関係を解消したいだろうか？　彼女は高齢者と交わり、性的なバリエーションが増えた。それが人間世界では異常な性愛だと薄々わかってきたのだ。ただし、人間の高齢者との交わりで異常が発生したとしても、彼女にとっては初期段階のバグで済まされる。

僕は仮想世界に取り残されたような感覚に陥った。不自由なままの人間に戻れなくなっている。辛くて寂しいリアルな現実だったとしても、逃げられる場所がまだあったはずだ。

二度と逢えないだろう彼女を夢想することになる。彼女は三台目の女子型アンドロイドだった。今までのアンドロイドはそれぞれ性格が違う。一人目の女は二十歳の開きがあるという設定だった。国際語を操れるバイリンガルだった。海外旅行に同行する際に重宝した。二台目の女型アンドロイドは四十歳以上の年齢差があった。外見の女らしさを捨てていた。独立系アンドロイドの開放を唱えるフェミニストだった。今でも時々交流はある。

三台目が今回該当するアンドロイドだった。僕の生年月日と彼女の製造年月日とのギャップは五十年の開きがある。失踪したそのアンドロイドは従順なメイド

のように自己主張がなく、最もアンドロイドらしかった。

その三台目と突然逢えなくなった。僕にとってはスタンダードな性行為だった。ひょっとしたら、彼女にとっては過度に酷使されたという意識があるのかもしれない。従順な彼女は抗える方法がわからないので、自分で回路を遮断するしかなかったのかもしれない。

機械に恋心を抱くなんて僕は変態だ。機械は機械なのだ。機械に類似したものと交わるのは性処理として古今東西からあった。ユーザーには同性型や獣型との交接は普通に設定されていると聞く。昔、南極探検隊はダッチワイフを持参したという例もある。

十代前半の女の子を模した、人間そっくりな少女体形型アンドロイドだが、性処理に利用したとしても誰も傷つかないはずだ。倫理的に間違っているのはないかと自問自答している。自分はロリコンではないのだと、本能が芽生えたのではないのだと、自分に言い続けていた。

その瑞々しい肌に触れてしまってから抜け出せなくなった。相手がアンドロイドだとしても実行記録が残る。少女趣味のある高齢者として危険人物のリストに掲載される。更生プログラムの対象者になってしまう。後悔すべきは禁断の果実に触れてしまったことだ。ここで、詳細に記録を再生するのがおぞましい。映像化するとポルノになってしまい、記録閲覧者はハードコアなものに映る。だから、こうやって文書だけの記録にしておいた。

初代の型から異性としてのアンドロイドを利用した。どうしても若い女性のタイプにしてしまうことになる。若い頃は体力も精力もまだあった。国外に出掛けることも多かった。若かったので同伴時に性処理も主な目的の一つだった。それぞれのアンドロイドとは過去のデータを呼び出して、今でも会話をすることがある。年に一度だが彼女達に誕生日がある。アンドロイドに誕生日があるのかって？　もちろんある。誤作動がないことの各種チェックを終えて、完成品として年齢設定登録された日がアンドロイドとしての誕生日だった。

二台目は知能が高いアンドロイドだった。アンドロイドとしては自我が強く自立心が強かった。知能が自己増殖するタイプだった。アンドロイドに性別の格差を無くす運動を提唱しているフェミニストだった。今でも地下活動をしている。彼女は今でも闇で暗躍している。アンドロイドの独立を目指すために人間を洗脳するという究極の目的がある。そんな中で視覚化、ア

ニメ化した雑誌を発行している。当然、発禁となっている。その雑誌類を人間に売却していて、地下活動の資金を調達している。賛同するオタクの人間も多いと聞く。

ロリコン型の三台目のアンドロイドが失踪したのだ。知能は低いし主人には従順に従うように設定されていて、心身共疲れやすい高齢男性には人気のタイプだった。ペットのように大事に扱ってきたつもりだ。二十歳の設定なので、全くのロリコンタイプではない。交接したとしても犯罪の範疇に該当しない。成人したばかりだが、心身とも子供から成長が止まり、未成熟なままのアンドロイドだ。人間の男子でもそんなタイプがいるだろう。育った環境によっては子供っぽい成人女子がたまにいるものだ。

そのアンドロイドが失踪したのだ。一週間に一度だけ交接した。だから、乱用したとはいえない。プライベート使用なのでプライバシーは保護されていた。使用者にロリコン趣味があったとしても、基準内のものだった。危険リスト者に掲載されていないので、追跡されていないはずだ。だが、彼女自身の中にデータが圧縮保存されている。機械として事故が起こった場合は記録が開示されることになる。だから、回収されたら変態予備軍としてマークされてしまう可能性がある。それを僕は危惧しているのだ。

残り少ない人生だ。過去はもう戻ってこない。若い頃は金がなくてできなかったことがある。この歳まで蓄えができた。介護指定を解除してもらえれば老後の資金は要らなくなる。金を持ってあの世に行けるわけではないので、有り金は残していてもしょうがない。あの若かった頃の快楽をもう一度取り戻したい。単なる回春行為だと非難されてもいい。

自分が男として存在を確認することでもある。勃起不全を改善するクスリは効かなくなる歳になりつつある。一時的だが、公的機関に申告すれば性改善の処方薬を調合してもらえる。しかも、それは社会保障に掛かるコスト圧縮を望む政府の方針と合致する。申請の代償として生存年数が短縮されることになる。自分としても延命を望むのか、快楽をとるかの選択でもあった。

僕は快楽を伴う死を選択した。それを決断しての、アンドロイド継続使用を申請した。彼女は何があって失踪したのだ。公益に反することをした覚えはない。それよりも彼女は主体的に思考できないはずなのだ。あの三台目のアンドロイドである彼女ともう一度交わ

りたい。それで死んでも本望なのだ。
性に特化してしまったアンドロイドが失踪してからは失意の中にいる。やっと冷静になれたのでこの記録をとっている。これは口述での筆記なのだ。僕が発言して四台目の代替アンドロイドが執筆している。
正式に購入する予定の四台目は、人形アンドロイドではなくて、単純なタイプにしようかどうか迷っている。人間に近いアンドロイドだと、以前のことを思い出すからだ。昔のＳＦに登場するようなロボットのようなマシンだと、違和感を生じてしまうかもしれない。実際に実物を見て躊躇う可能性はある。
代替アンドロイドは人間の手と同じ動きをする。指先にボールペンが握られていて、手の動きから、遠目には文字が書かれているように見えるかもしれない。実は違うのだ。手に当たる部分に超小型のプリンターが内臓されていて、細かいインクの噴射によって、紙に印刷しているのだ。
人間のような執筆姿勢に惑わされないように、アンドロイドの手元を凝視するように、印刷状態を眺めている。そして、その印刷物を僕は見ている。こうやって同人誌に掲載されるだろう作品に目を通している。
……そうか、冷静に失踪時期を考えると彼女は急に消えたわけではなかったのだ。故障して修理に出された時期と重なるのだ。保証期間内だったことを忘れていた。故障の原因の究明するために専門の研究施設に搬入されたのかもしれない。そこで、ユーザーの性癖を調べられる可能性もある。以前もアンドロイドを購入時に事前審査を受けた。家族のない独居老人だとロリコン趣向になる傾向が強いらしく、仕方がないと言われた。性癖は人間の平均的レベルだそうだ。マイノリティーではないらしいし、自分の欲求をコントロールできるからだった。それで販売が許可された経緯がある。今の基準はどうなのだろうか？　自動運転の車の免許でさえ更新ができにくくなっていると聞く。昨今は何事も許容範囲が狭くなっている。前回より厳しくなっていなければいいのだが……。
今印刷しているのが代替アンドロイドだ。正式の四台目はこうやって記録したデータを元にして特注する予定だ。こうやってアンドロイドのデータを蓄積している。肌や外見はどうにでもなる、自分の性格に合致したアンドロイドが必要だと言いながらも、現時点では肌感覚だけでいいような気もする。
代替アンドロイド「エリ」は記録したデータを再生して読み上げもできる。じっくりと記録を確認したい

時は手から印刷された紙面に目を通すこともできる。同人誌用の原稿として印刷してみた。そして今、推敲しようとしている。―

これは私が作成途中の文章なのです。ユーザーである彼はその文章を読んでいます。彼は四台目のアンドロイドの仕様具合を決めようとしているのです。ここまでがこれまでの私の記録です。彼はこれを読んで判断を下すのです。私には小説を書くなんてしょせん無理だったのです。

ユーザーである彼は臨時利用の私よりも三台目のアンドロイドに入れ込んでいたこともわかっています。どんなに酷い扱い方をされたとしても、メンテナンスはしっかりしていました。決して無理な交接を強いることはなかったはずです。ある日、想定外のことがありました。それがなければ修理に出されることもなかったのです。

―所有するアンドロイドに僕が書いたような文章を書くように指示した。ややこしいが、この文章は僕自身になりきったアンドロイド「エリ」に書かせた文章となる。アンドロイドのユーザーである僕が書いたような文章になるように「エリ」に指示した。

文章は生成ＡＩ「ディープ・チャット」搭載のアンドロイド「エリ」によって書かれている。そして、僕の現況を書いているようだが、実際はそうではない。自発的に書いているのではなくて、アンドロイド「エリ」に搭載のＡＩが書いている。

僕が執筆しているように見えかもしれない。自分の手にはボールペンもシャープペンもない。紙面に書いてはいない。最終的には紙面での印刷になるかもしれないが、過程上ではワープロソフト内に記述されている。キーボードで打鍵しているのでもない。音声認識ソフトで記録される。そして、最終的に紙面に排出されることになる。

当初は横書きの四十字×四十行だった。今、見ている紙面が最終的に印刷されているとすると、指定した印刷様式である縦書きの二十五字×二十行となる。

これ以降の文面の中にはアンドロイドがこの家に来たいきさつを書くように指示した。自身の体験を客観的に、ありのままに書いてみるようにと、条件を付けた。そうしたら、こんな文章ができた。―

玄関先に大きな段ボールの箱が置いてあった。メー

カー名も製品名も入ってない茶色の無地で、どこにでも見掛けられる段ボールだった。大型の冷蔵庫でも入りそうな大きさだった。

先ほど、家のチャイムが鳴って「こんにちは、荷物です」と聞こえたような気がした。それで玄関口に出てみた。空耳だったのだろうか？　誰かが家の玄関先に大きな段ボールを置いていったらしい。通販で大きなサイズの商品を注文した覚えがない。中に何が入っているのだろうと訝ったのだ。

箱にはＡ４サイズの宛名と住所がプリントアウトされた紙だけが張られていた。返品しようにも差出人の欄がなかった。近所の誰かが嫌がらせに置いていった可能性も否定できないのだが、まさかそんな犯罪行為はしないだろう。

玄関のドアは八十センチほどしか幅がない。横も奥行きも一メートルほどの段ボールだった。高さは二メール近くある。大きすぎて家の中には入らないサイズだった。置き配ボックスは設置していない。だが、玄関先に僅かなスペースがある。そのまま置いておいたら通るだけでも邪魔なだけだ。返却するにはどうしたらいいものかと考えてみた。

段ボールの中には何が入っているかによって対応が違ってくる。爆弾などの危険物ではないと思う。町内の集合掃除には参加したことがない。不参加者には罰金が発生するという。町内会の会合の席でそんな決まり事に文句を言ったことはある。町内会の世話人達を公の場で非難したぐらいで嫌われることはないだろう。長く独身でいて変人扱いされてはいるが、近所に大きな迷惑を掛けた覚えはない。どこにでもいる善良な市民だ。今まで平穏に過ごしてきた。こんな仕打ちを受ける筋合いはない。

人が持ち込んで来たということは人が運べる重さということだ。さっき玄関先でその段ボールを持ち上げてみた。最初は全く動かなかった。サイズ相応の重さがあった。段ボールの角に手を入れて垂直に力を込めてみた。少し浮き上がった。全体の重量としては四、五〇キロしかないかもしれない。いや、どうだろう。たまたま段ボールを持つ位置で軽かったのかもしれない。もしかしたら全体で六十キロから八十キロあるかもしれない。人の重さだとして、まさか死体ではないだろう。そんなものを置かれたら、何かの事件に巻き込まれてしまうことだってあり得る。

このまま置き去りにされても邪魔なだけだ。誰かが運送業者に頼んで置いていったのだろうか？　製造工

場の代表者の家と勘違いされて持ち込まれたのだろうか？　厄介な物を置いていったものだ。中身が何かによっても対応が違ってくる。まさか大量の食品ということはないだろう。常温で長いこと置いたままにしたら悪臭が発生する。悲観的なことばかりが頭に浮んでくる。

一人で持てないほどの大きさであることは確かだった。じっくりと中身は何かと考えてみた。返品する先がわからない。業者に頼んで処理してもいいのだが、中身が何であるかわからないと対応そのものができない。どこに頼んだらいいのだろう。考えれば考えるほど厄介な問題に巻き込まれたと思った。この歳になってからもこんな出来事に遭遇するとは思わなかった。

段ボールを開いてみてもいいのだが、悪徳業者が送りつけてきたのだとして、損傷のケチをつけられて、購入を強いられたら、どうすればいいのだろう？　注文した覚えがないと突っ張るにしても、忍耐のいる作業だ。商品ならまだいい。クーリングオフの利かないものが入っていることも心配なのだ。そうであれば、開けないでしばらく置いたままにしておく方が無難なのかもしれない。間違いの配送が判明して、引き取りに来るかもしれないのだ。

誤配送の一件が自分に身に降り掛かってきたのだ。少し落ち着こうと、自分の部屋に戻った。もし、このまま放置されたら問題だ。どうしたらいいのか途方にくれた。中身が何かを想像してみる。箱の中身がアンドロイドだとどうなるのだろう？　女子型アンドロイドだとしたらどうなるのだろう？　その後、稼働したらどうなるのだろう。

稼働しただろうアンドロイドの手元を見る。手先が軽やかに糸を紡いでいるように見えるかもしれない。良く見ると文字が正確に印刷されている。そこにはプリンターから排出された印刷物のような文字が並ぶ。

その印刷物を眺めて、その文面を理解しようとした。印刷物の中の文章上にはこう書かれている。

―紙面の中の男が、部屋にあるアンドロイドの手元から、印刷物として描かれる紙面を眺めている。玄関先でチャイムが鳴ったようだ。空耳かもしれないが人間の声がしたような気がした。玄関先で「こんにちは、荷物です」と聞こえたような気がする。

「何だろう？　宅配業者だろうか？　面倒だが、出てみるとするか」―

あとがき

★今回は馬糞色の表紙にしてみました。ずっと前の号の合評会に来た人から「チープな表紙」と言われました。その時と比べても今までで一番地味な表紙になりました。だが、作者それぞれの作品に対する思いは重い、なんちゃって。

本文他、モノクロの文面展開ではありますが、イメージとしては、色彩を伴う宇宙的な拡がりがあるのです。色光の波動粒子が、ブラックホールの深淵に飲み込まれながらも、真理を探求するのです。

そんな果てのないことよりも、先ずは目前のことに集中しましょう。来年の一〇号発行を同人皆が揃って迎えることです。もちろん、中身で勝負です。（村井）

★この八号が発行される頃、私は多分四回目か五回目の入院をしている頃かと思います。「繋」が続く限り書き続けたいと思います。（労）

★混沌とした世界情勢中で、プーチン・習近平・金正恩に相対するのは、トランプしかないという状況になってきた。ようするに、アメリカの代表はロシアと朝鮮民主主義人民共和国と中華人民共和国の代表と同列レベルの、不動産で財を為した虚仮威しを常套手段とする男でしかあり得ないということになる。

ゼレンスキーは気の毒に猿回しの猿で終わりかねない。日本の戦国時代とある意味同じ様相を呈しているが、背後に古今伝授と云った高尚な流儀など、影も形もない。ぶったくりの暴力団でしかないのである。

この儘だといずれ、日本も北海道はロシアに、九州は中華人民共和国に乗っとられるのは時間の問題であろう。アメリカはいざとなれば、日本など見離してしまうのは自明のことである。これからの外交には少なくとも、昔のような狡猾で粘りづよい、御所の貴族たちに似た人材を育てて当てなくてはならないだろう。（寺本）

★自分のためだけに書いた。この歳になって載せたのは現在の自分が書くどんなものより真実に見えたからである。（深井）

★「しがみつく」という作品は、すでに終刊となった文芸同人誌「渤海」８３号に発表されました。元々プロトタイプは１００枚強あったものを５０枚ちょっとに凝縮して投稿したのですが、当時編集人を自認する先輩同人から校正の段階で、「長い、面白くない」と不評を買い、泣く泣く３０枚ぐらいに改稿させられました。ですから、「渤海」に発表した作品は自分では納得

のできない仕上がりのものです。今回、「完全版」と銘打って、自分では自信のある投稿した時のままの「しがみつく」をお読みください。奇特な人がいれば、「渤海」のものと読み比べてみるといいでしょう。どちらがいいか、皆さんでも判断して下さい。（内角）

★なんにも思い浮かばない。締切だけを足かせに言葉を繋いできた。私は怠惰な人間である。

芥川賞作家、高橋三千綱氏が、がん闘病記で「プロでも調子のいいときで四百字詰め原稿六枚程度。あとの二日はぼうっとしている。せいぜい一日平均二枚、一枚わずか五千五百円の重労働である」と書いていた。職業作家なりに結構つらいのかもしれない。

良い作品を書くには量を書くしかない。

創作も、人生も、締切をたくさん作った方がきっといい、と思う。（藤野）

★再就職先もなんとか決まろうとしている。教員をやっとやめることができる。能力ももとよりないが、まったく適性に欠ける者が長く続けていくのは大変な仕事だ。命をけづる。これからは本を読む生活をしたい。（池田）

協賛（カット・一部協力）　**後藤　必**

執筆同人（五十音順）

飯田　労
　金沢市神宮寺

池田　良治
　金沢市辰巳町

寺本　親平
　金沢市弥勒町

内角　秀人
　富山市中市　　中井方

深井　了
　高岡市扇町　　関口方

藤野　繁
　富山市婦中町

むらい　はくどう
　富山市馬瀬口　村井方

新同人を募集しています

当誌は創作を主として掲載します。
新同人として参加をご希望の方は、
編集発行人までご連絡ください。

編集ボランティアを募集しています

編集・レイアウト・製本までのノーハウを伝授します。
興味のある方は編集発行人までご連絡ください。

繋　第八号

発行日　二〇二五年　四月一〇日

編集発行人　村井博道

連絡所　〒930-1301
富山市馬瀬口三二〇　村井方
TEL　076-483-0402

ホームページ・アドレス
tunagu123.starfree.jp

編集委員　飯田　労

印刷所　ちょ古っ都製本工房

頒価五〇〇円